靈鳥によつて、啄み行かれる形を見屆けようとする祭式が今でもある。小さい里々の類例までを算へるならば、十指を屈しても足らぬほどに多い。それをトリバミの神事又はオトグヒの祭などゝ呼ぶことが、どの地方に行つても話題になつて居る。大隅の百引村などのは、之をミサキドン祭と謂つて、日は四月の八日になつて居るが、餅を葉苞に包んで高い枝に懸けることは、東北の正月四日のヌサカケも同じである。ミサキドンはこの土地では三光鳥のことだといふさうだが、それが出て來て食はぬ年があると、それを凶兆として怖れる點は、他の遠くの土地とも一致する。東日本でも茨城から福島縣の海岸地方にかけては、烏をオミサキ〳〵と謂つて喚び、この初山の日の餅を與へて居る。オミサキの信仰は弘く分布し、又色色と變化して居て、中には人に祟るやうな靈だけをさういふ例もあるが、語の起りはやはり先鋒のミサキであつて、神の御使はしめとして神慮を代表する者といふ意であらう。其中でも一ばん多いミサキは烏と狐で、常は嫌はれ憎まれる動物なるが故に、此日出現する者だけは、却つて特別なやうにも考へて居たのであらう。實際又不思議なほどよく人の惡意なきことを知つて、この日だけは一向人を怖れずに近づくと謂つて居る。

或は少年たちが烏の啼聲を眞似て、祭の日の神供をもらひに來る風もある。兵庫縣蘆屋の烏塚なども其一例で、是は既に百數十年前の攝陽群談にも見えて居る。もとは小兒が烏の身ぶりをして、正月の供へ物を貰つて食べたのであつたが、現在はたゞ口々に、

カァカァカァ
山の神のさいでん棒

と唱へつゝ、水車納屋などを巡つて米を貰ひ集め、自分で團子をこしらへて烏塚へ供へに行くことになつて居る。それを一同の者も食べることは勿論であらう。同じ縣の姫路市附近の或村でも、氏神社の秋祭の日、神供と同じ飯で御握りを多く作り、之を參詣の兒童に分ち與へるのを、今でもカラスノママと謂つて居る。愛知縣渥美半島の龜山村の鎮守の祭などは、俗にカァカァ祭とも呼ばれ、是も少年組が皆烏の眞似をして、參詣の人々の持つて來る供へ物を、片端から貰つて食べるのださうである。

さうかと思ふとこゝからさう遠くない靜岡縣西部の村々では、オコンコンサマといふのが同じやうな子供行事であつた。或は是を又オシャガミといふ郡もあるが、双方ともに霜月十五日の地神の祭の日で、やはり彼等が狐の眞似をして、御供へ物の赤飯や大根膾などを貰つて食べるのである。オシャガミといふのは、越後では山の神をさういふ例もあるから、或は

この日の祭を享けたまふ神の名か、さうでなければ「めしあがる」を意味するオスといふ古語と、關係のある名稱だつたかと思ふが、子供たちは今では是をたゞしやがむことゝ解して

おしやがみおくれ
しやがんだにおくれ

などゝ口々に唱へて貰ひに來る。なほ此地方には正月の鉈借りといふ行事もあり、全體に子供が何かを貰ひに來る風が多いやうである。

三

小兒をして神に代つて饗應を受けさせるといふことも、諏訪の祭の大名行列その他、決して例の乏しいことでは無い。乃ち必ずしも烏や狐の眞似をしないでも、人間の中では子供が最も此役に適して居るのである。祭には尸と稱する童子を選定して正座にすゑ、之を神靈の代表者として飲食を薦める例は支那にも朝鮮にも古くからあつたことだといふが、我邦でも神のヨリマシに向つて、尸童といふ漢字を宛てゝ居る。童兒を此任務に就かしめた風習が久しくあつたのである。しかし是非とも童兒でなければならぬといふわけもなかつた。前年私が南會津の或舊社で目擊したのは、兩親の揃つた穢れの無い男女が、めい〳〵頭の上に酒や御膳を載せて、列をなして神前に進むと、神殿の中には紅い袍を着た神主が坐つて居て、一つ〳〵それを受取つて居た。中の樣子はよく見えなかつたが、少なくとも器の蓋を取つて食べる形をするらしかつた。現在普通の考へ方では、神は飲食物の精だけを御取りになり、見た所少しも耗つては居なくても、その養ひの力はもう拔けて居ると、思つて居る者が多いやうだが、以前は現實に誰かゞ神に代つて食べたので、それが又神主といふ言葉の由つて來たる所でもあつたかと思ふ。今でもさういふ形をまだ保存して居るものが、小さい御社の祭には捜したら有るだらう。能登半島の奥の農村で、アエノコトと稱する家の祭は、是亦冬の半ばの田の神への御禮申しであつた。田の神は愈〻稻作りの大事業を終へて、それ〳〵の耕作者の家に御還りになる。それを饗應するのだからアエノコトとは謂つたものらしい。固い舊家の本家では、今でも續けて此祭をして居る。先づ新らしく風呂をわかして、田の神さまを湯に御入れ申すといつて、主人が裃を着て御案内の役をする。神の御入浴といふのは實は主

人自らが、その禮服を脱いで風呂に入ることであつた。それから座敷へ御手を引いて、田の神を御連れ申し、床の正座に本膳を据ゑて御もてなしをする。それには主人が一つ〳〵、食器の蓋をとつて是は御飯、是はお膾、是はおつゆといふやうに、大きな聲で其名を言ふのが例で、其爲に田の神さまは久しく土の中においでゝ、御目が見えぬのだなどと說明して居るが、さういふ風に考へ始めた原因は別にあるのである。是とよく似たことは恵比須樣は聾だといひ、又は大黑さまは御耳が惡いから、よほど近くに寄つて大きな聲で「大黑さま豆を摘まつしやれ」と言はなければならぬといふ言ひ傳へで、それは一箇所や二箇所の珍らしい例でなく、前者は上方から關東まで、後者も亦越後から東北一圓に、十二月九日の大黑樣の御年取りに必ず言ふことである。是等も能登半島のアエノコトと同樣に、祭主が神に代つて直ちに食べてしまはずに、一つ〳〵大きな聲でその供へ物の名を唱へる風があつたのを、いつの頃よりか神は御目が惡く又は御耳が遠いからと、解するやうになつた結果かと思はれる。

四

今日年中行事と呼ばれて居る我々の家の神祭りでは、今でも其日に家の者が食べる御馳走と同じ物の初穗を上げる。といふよりも寧ろ神樣の召上がるのと同じ物を、神前に列坐して共々に食べるのがきまりである。此日の爲に特別の鍋釜や特別の膳椀があり、又常の日と變つた食品を調へて上げるとすると、それが同時に又人間にとつても、さういふ珍らしいものが食べられる日となるので、節供といふ名も其文字が示す如く、基づく所はこの節々の供物に在つた。それが後々はいつでも食べたい時に粽をこしらへたり、店屋へ買ひに行けば年中餅があるといふやうになつて、晴の膳といふ觀念は甚だ不明なものになつたが、それでもまだ我々は突然小豆のこは飯などを出されると、けふは何だつたかと訊きたくなるやうな氣持だけはもつて居る。祭日と食物との深い結び付きは、丸つきり斷絶してしまつても居ないのである。たゞ現在は一般に公けの祭だけが、神に御供へ申す品物と、同じ時刻に人々の食べ

るものとを、二つ全く別々にして居るので、著しくこの民間年中行事の信仰上の意義を、稀薄にしてしまつたことは爭へないのである。

しかし今日のやうな過渡期には、まだこの双方の中間段階が幾らでも、尋ねて見ようと思へば見られる。たとへば一方にはおもたゞしき官國幣社の大祭にも、御供屋水屋の中での調理があつて、神さまが卽座に御箸をおつけなさるやうな食物をさし上げ、その供進の殘りを奉仕者が共々に、いたゞく例は幾らでも有ると同時に、他の一方の家々の年中行事でも、其際は必ず神を祭り、先づ其節日の供物を神にまゐらせて後、さて一同も同じ膳に著くといふ風習がまだ〳〵多い。盆の所謂ホトケ祭などもその一つの場合なのだが、是は佛法の支配のやうに思つて居る人がもう多いから、わざと問題にせずに置く。正月に至つては是がどうして目出たいのか、どうして此日をイハフのかといふことを、考へずに居るといふことはまちがつて居る。神棚に御燈明も上げず、御供へ餅も供へずに、たゞおめでたうと謂つて居るのは實はをかしい位のものである。それでもまだ全國の半ば以上、殊に農村の古くからある家では、歳神さま歳德さま又は正月樣ともいふ神を、歳棚又は拜み松の上に祭つてをり、その神さまにはいはひの飲食物の、すべての初穗を上げずには居ないのである。佐渡の海府の入込んだ村里などでは、この行事を神やしなひと稱し、正月年男の最も大切な役目は、この神やしなひをすることだと謂つて居る。神やしなひなどゝいふと、何だか非常に失禮な言葉遣ひのやうにも聽えるか知らぬが、それは寧ろヤシナフといふ動詞の用途が制限せられて、妻子とか眷族とかに食を給する場合だけを、言ふやうになつた結果に他ならぬ。信州の北半分[illegible]でも、正月だけにはまだ此語の古い用法が傳はつて居る。それで年神門神などの松に、葉を曲げてこしらへた椀形の食器を一つづゝ附けて、之をオヤスともヤセツボとも謂つて居る。或は又ヤスノゴキといふ處もあるが、何れも皆神を養ひたてまつる器物といふことである。他の地方でも伊勢の南端、伊豆の島々又は東京近くの農村にも是が見られ、其名はツボケとかゴキとか結び皿とかいふだけになつて居るが、正月に年男が毎日の式の食物を、清い箸を以て少しづゝ、其中へ入れてまはる風だけは一樣である。卽ち又門松といふ一つの木を以て祭場を標示して居る神々に、正月のオヤシナヒをすることは同じである。門松といふものゝ起原に就ても都會には又新らしい別の解釋も出來て居るが、田舍では之を御松樣と敬語でよび、春の境になつて必ず一定の方角から、御迎へ申すといふのが多いから、本來は又一つの神の御座であつた。詳しくは私の集めた歳時習俗語彙に列擧してあるから、爰ではもう述べ

ないことにする。

五

今一つの例として擧げ得るのは、冬の始めに又年の暮に近よつて、營むところの惠比須講である。商家でも之を大きな樂しみの日として居たが、やはり正座には神を祭つて居た。百姓えびす講は舊曆十月の二十日が多い。講とはいふけれども實は家々のいはひ日であつて、元の起りは能登半島のアエノコトと同樣に、やはり農神の祭だつたやうである。他の土地たとへば北陸や奥羽で、田の神・作の神として傳へて居ることを、九州四國の農村では大黑樣といひ、中部地方などは惠比壽大黑、又關東では唯惠比須さまとも謂ふので、いつの世から其樣な名が始まつたかは推測に難くも無い。とにかくにこの日にも祭があり定まつた食品があつて、それを家一同がたまはる前に、最初の一人前を神酒と共に、神樣に供へるのである。注意すべき一つの特徴には、この日の神の御供へ物だけはエビス膳と謂つて、折敷の板の杢

目を堅にしてする慣例のあることである。自分の故郷播州中部などではソウバ膳と謂つて居るが、常の日には非常に嫌はれることで、いつも私たちはやかましくなほされたものであつた。ところが惠比須さまに上げる膳のみは、わざと膳の木理を縱にしたので、それで斯ういふ名が行はれて居るものと思はれる。越後の刈羽郡などでは、惠比須さま以外の神々にも又寺方の御供へにも是をするといふが、その他の地方にも是に近いことがあるかどうか。又ソウバ膳といふ言葉にも何かの暗示があるのではないかどうか。氣をつけて見て居たいと思ふ。或は神さまに限つてすることなるが故に、常人の常の日には忌み畏れてしなかつたのを、後には又惡いことのやうに思ひ始めたのではないか。しかも是たゞ一つの點を除いては、全然人の食べるのと同じ形の食器で同じ物を供へるのが、特にこの所謂惠比須講の作法でもあつた。遠州濱松附近の農村の生活を記述したものゝ中に、中道君といふ人が報告して居る、此地方の惠比須講では、家の者もこの同じ膳に坐つて、先づ神樣の箸を取られるのを待つて居る。餅や汁の椀が木器である爲に、ぢつと耳を傾けて居るとコトリといふ音がする。そうらおえびす樣がめし上つたといふので、一同の者が食べ始めるものだつたさうである。

斯ういふのは誠に幽かな痕跡に相違ないが、いくら幽かでももし是が何ものかの痕跡であ

つたならば、いつかは必ず思ひ合すやうな事が、他の方面にも發見せられるであらう。少なくとも我々の祭の日の食物は、一旦神にささげたものを卸して、後でそれを人間が食べるのではなく、同じ品を同時に、即ち酒ならば同じ一つの甕から、餅ならば同じ臼で一度に搗いたものを、分けてもらつてすぐ後で食べるのである。然るに今日の神職家たちの、直會と呼んで居るものには二通りあつて、最も大きな御社の大きな祭にも、式の進行中に神前で同じ食品をたまはるのと、祭が畢つて供物を皆下げてから、社務所などに持つて行つて、あとでゆつくりと頂戴するのを、直會だと謂つて居るものとがあり、何だか第二の方が段々と多くなつて行くやうにも思ふ。この二つの食事は恐らくは別々のものであつて、どちらでもよろしいといふことは無い筈であるが、現在混同し又は區々になつて居るのは、何か近頃の理由があらう。私などの見る所では、是は飲食物の單位一體といふことが、段々と考へられなくなつた爲かとも思ふ。殊に酒などは現在は酒造會社の巨大な桶の中に釀され、それを五升一斗と取分けて行くのだから、それを一つのものとは見にくゝなつたが、以前はどの樣な粗末な一夜酒でも、一つの場所で一つの時に、一つの定まつた桶又は甕の中に作り込み、その初汲みを取つて先づ神にまゐらせ、殘りのものは其甕の底の顯れるまで、掬んで飲むのだから神さまも人も、同じ酒に醉うたといふことがよくわかる。餅なども現在は形を重んじ、又大きくこしらへて上げるやうになつたから、臼を共にするといふことは考へられず、是だけは共同とは言ひ難いやうだが、以前は御粢（オシトギ）だからさう大きい鏡には取れなかつた。今の餅搗きでも杵に附いて飛び散る部分が多く、それを拾ひ集めるやうに臼の下に新薦を敷くこともあれば、又はわざと荒々しく搗いて、その落ちこぼれをこしらへる樣にする處さへある。米を水に柔らげて、はたいて粉にして居た頃は尙更のことで、其爲に毎年の神供の餅が小さくなり易く、それを監視したり檢査したりする必要もあつた。出雲の北濱村で餅吟味などゝ謂つたのも是であつた。その飛び散つた部分は勿論奉仕者の所得で、神さまより先にそれを食べてしまふやうなことは恐らく無かつたであらうが、のけて置いて御祭と同時に又はその後で、食べたらうことは疑ひが無い。即ち是なども亦決して「御さがり」では無かつたのである。

六

飯を神供として居る場合などは、この相饗の關係が可なりよくわかる。紀州で有名だつた大飯の神事のやうに、多量の米の飯を炊ぐ例は折々あるが、斯ういふ名を得た御宮には、途法もない大きな飯釜が備へられて居て、一度に五斗六斗といふほどの飯を炊いで、しかも其全部を神々に供へるのではなかつた。九州の北部一帶、又近畿でも處々の御社に、御清盛り又はオキョウサマ、文字には御經だの京の飯だのと書いて居るのは多くは是で、杓子を水に沾らして出來る限りこの御飯を高く盛り上げ、其上端を柿の實のやうに細く尖らせ、その尖りの缺けることを非常に警戒して居るものもある。或は又鉢卷結びなどゝ謂つて、神さまに上げる分だけは清い葉の鉢卷をさせることもあり、又はツモノケメシと稱して多分は錘の形に擬した三角むすびをこしらへる處もあつた。つまりは此分は神さまの御料といふことを、最も具體的に標示するので、此點は人生の三大機會、卽ち誕生と結婚と死亡との三つの場合に、我々の爲に供せられる高盛りの飯も同じに、是は心ざす方への特別の供給といふことを、この異常の形式によつて明確にしたものゝやうである。從つてこの飯を調製することは何よりも大切な役目であり、土地によつては是は男だきの飯と謂つて、女には一切手を著けさせず、或は西多摩郡の檜原村のやうに、この爲には最重なる潔齋を重ね、もし途中で女に逢ふと、何度でも川の流れに引返して、寒中に水浴をしなほすといふ例さへある。しかも斯うして至れり盡せりの謹愼を以て炊き上げた御飯とても、決してその全部を神に進らせるといふのでは無かつた。一部は最初から氏人の分けて戴くものときまつて居たのである。肥前の天川村などでいふオキョウマウシは、是が祭の通稱となるほどの主要行事で、時は舊十一月丑の日の收穫祭であつたが、神の御清盛りを用意すると共に、更に同じ赤飯を以てこの柿の實形をしたやゝ小形のものを數多く作つて置き、それを參拜の人々に一つづゝ分け與へると、いたゞいた者は其まゝ家に持ち還つて、家族は勿論飼牛にまで、少しづゝ分けて食べさせるのださうである。東京や京都の多くの御社でも、御供(ゴクウ)と稱して同じ打菓子などを多量に用意し、祭の月神に詣でた人たちに付與するのが例であるが、是も亦御供の卸しを處理するのでは無くして、やはり御供と同じ物を分配するのである。

この以外の、一社毎にちがつて居る色々の供物でも、古來之を一つの特色として居るやうな祭では、やはりこの方式の分配を豫期して居る。たとへば魚類などは丸ごと御供へ申すのだから、どうしても卸しを戴くより他は無いやうに思はれるが、是にも丹波の篠山に近い澤田八幡の鱧切祭や、美濃西部の某村の鰻祭などのやうに、奉仕者が神前で料理をして、その一部を神供とする例も多く、東京でも淺草の或眞宗の寺に、鯉料理をする古式で有名なものがあるが、その原型は古く京都の御社の祭にも有ると言はれて居る。その他近畿地方に於て屢〻名を聽くエソ祭・棒鱈祭・カスベ祭・鮗祭、野菜の方でも諏訪矢ヶ崎の御座石神社の獨活祭、甲州谷村附近の羽根子の蒟蒻祭、長門の吉部八幡の芋煮神事のやうに、祭の日必ず神に供へ申し、同時に氏子の家々でも皆たべるといふ食物が、いつの昔からとも無く色々と定まつて居た。それが今日のやうに、神さまにはすべて原料のまゝで御目に懸けるだけとなつては、たとへ古來の慣例によつて、今なほ村中がそれを食することになつて居ようとも、雙方にはもう聯絡が無く、言はゞたゞ一つの奇習となつてしまふのである。國の祭式の統一といふことは歡ばしいが、その爲に特殊神饌の省みられなくなつたものが多く、神と人との最も大切な接觸と融和、卽ち目には見えない神祕の連鎖が、食物といふ身の内へ入つて行くものによつて、新たに補强せられるといふやうな素朴な物の考へ方が、愈〻近代人の共鳴しがたきものになつて來るのである。

七

故に日本の祭の本の意を掬まうと志す人々は、せめては此樣な大きな變遷があつたことだけは知つて居なければならぬ。それが望ましからぬ變遷であるか否か、再び古い形に復すべきものか否かを決するのは、私たちの引受けて居る學問の領分では無い。が兎に角に神さまに魚や野菜物の生のまゝを、御供へ申すといふやうになつたことは、疑ひも無く相饗思想の衰微ではあつた。直會の方式の少しづゝ改まり、又土地によつて區々になつて居るのも、その結果なのだから今は何とも致し方が無い。全體いつの頃どういふ事情から、此樣になつて來たものか、それも改めて大いに研究して見なければならぬが、以前はさういふ例の極めて稀であつたことは確かである。年々家の中に行はるゝ節供の行事は、是はもう「祭」の他に置

かれて居るのだから、ちがつて居ても不思議は無いと思ふかも知らぬが、頭屋と稱して順まはりに、ところの神を祭る家でも、今はまだ人の食べるのと同じ物を上げて居る。といふよりも神のめしあがる物を人も食べて居る。食することを「たまはる」とも「いたゞく」とも謂つて居る。御社の中で祭をする場合にも、多くの舊社には御炊屋御水屋、又は御供舍といふ建物が附いて居て其中で調理して居る。水屋は我々の家で言へば勝手元又は流しなのである。さういふ屋舍の附設せられない場合には、特に指定せられてある家から、御膳をこしらへて頭の上に載せて運んで來る。其器にはユリ又はユリワといふものがあつて、一方には田植時に田人に飯を餉る時にも、この楕圓形の大きな盆を用ゐて居る。祭の時刻といへばちやうど所謂ジブンドキ、卽ち夕方と朝との食事の時刻であつた。卽ちそれからもう一度手數を掛けないと、とてもめしあがることの出來ぬ物を、さし上げる時刻では無いのである。たとへに引くのは畏れ多いが、我々の家だつてもそんな時刻になつて、生魚生野菜を贈られては當惑する。少なくとも贈つた人の好意が割引せられる。なぜ斯んな簡單なことが氣づかれなかつたのか。私たちには寧ろ奇異である。それでも諏訪の御祭に鹿の頭を七十五、奈良の春日若宮には猪鹿兎狸などの數十頭を、掛けて獻上した類の古い記錄があるぢやないかと、いふ人が多分あるだらうが、是は素より神の御目を怡ばしめまつるべきもので、當座の御饌の外だつたのである。犧には生けにえと稱してまだ活きて居るまゝを進らせ、その御用ゐの時刻方法を、神の思し召しのまゝにしたものもある。生けるを放たしめたまふといふ有名な御祭さへも出來てゐる。

此外に今一つ、問題になつてよいのは洗ひ米である。五穀の中でも米だけは生のまゝで、神に進らせる習はしは古くからしく、是を花米又はハナエリなどいふ語は全國に行はれ、又オサングといふ名も弘く知られて居る。オサングは又オサゴとも謂ふが、文字に書けば御散供で、或はもと是だけは供へ方が別であつたのかと思ふ。ウチマキといふ上品な語もまだ使つて居る人がある。之を御捻り(オヒネリ)と稱して白紙に包んで其まゝも供へるが、本來は是が祭の最も簡略な形であつて、心ざす神々の御ありかを確かめ難い場合などに、之を撒き散らすのが趣旨では無かつたらうか。是と似通うた形式は棟上げ祭の日の餅まき、又は節分の夜の豆撒きにも見られる。本來は穀物に特別の力が有るやうに、考へて居た爲かとも思はれて、現に米を栽培する馬來人などの中にも、この風習の盛んに行はれて居ることは、スキート・ブラグデン、近くは宇野教授の著述によく見えて居る。とにかくに是が酒にもなり、

餅や飯の資料であるといふだけで無く、生米も亦獨立して一つの食物であり、それが又他の四穀には無いことであつた。米嚙みといふ筋肉の名からも判るやうに、近い頃まで人がよく咬んで居た。倉庫の入口に「生米咬むべからず」といふ貼札がしてあつたのを私なども見て居る。それから糒米(ヒライゴメ)・燒米・ヲコシ米・炒り種などゝ、少しづゝ手を掛けて食べやすくしたが、元は其まゝでも隨分食料にしたやうで、乃ち是が昔からの神供の一つであつても少しも不思議は無いのである。餅なども今のふかし米を搗いて作るやうになるまでは、やはり亦一つの生米の食法であつた。前代に餅と謂つたのは今いふ生粢(ナマシトギ)、白米を水に浸して柔らげたのを、小さな臼杵で碎いて粉にしたもので、煮ても燒いても食べたらうが、其まゝでも食べられたのである。シトギは非常に古い言葉で、多分濕らせた食物といふことであらう。今はオカラコと呼び、中部以西では白餅・白粉餅といふ處が多くなつて居る。必ずシトギを供へるといふ祭はもう少なく、或は棟上げ祭の時に限るやうにいひ(建築祭だから火にかけることをきらふ)、或は秋冬の境の山の神祭の時だけに必ず之を供へるともいふ。今でも子供だけは後からまはつて之を食べて居るが、普通の成人はもう生では食べようとしなくなつた。卽ち人間の食習ばかりが旣に改まつて、神さま方にはまだ古い世のまゝのものを續けてさし上げて居る例が稀にはあるのである。

八

神さまの供物が人間の食べ物と分れて來た端緒は、或は斯ういふところにもあつたのかも知れぬ。中世の記錄にはたしかに食品であつた熨鮑(ノシアハビ)や昆布、榧とか鴨栗とかいふものも、もう其まゝでは食はぬ人が多くなつた。人は世につれて自由に好みを變へ、醬油とか砂糖とか胡椒とか、その他色々の調味品を使ひながら、神さまだけを元の御習はしに置き殘し申すといふのも相すまぬ話だが、それにもまして困つたことは、神と人と同時に同じ物を味はひ樂しむといふ、太古以來の儀式の趣旨が、追々と忘れられて行くことであつた。是は全く祭が新たなる文化を利用した結果、段々と其中心を供饌以外のものに移して行つて、大きな注意をこの點に拂はなくなつた爲であり、更に又一般に祭奉仕の役目を、限られたる家又は人に委ねてしまつたが爲であらう。

祭の奉仕者の專業化といふことは、日本の神道にとつては何よりも大きな變遷であつて、しかも基づく所は頗る古いと思はれるが、幸ひなことには今日はまだその推移の各段階が現存して居て、明かに其道筋を知らうと思へば知られる。必ずしも名も無い野山のつまやしろまでを比較の中に入れずとも、全國數千といふ官知の御社だけを見て行つても、甲から乙丙丁戊へと變つて來た、順序を尋ねることだけは可能である。たゞ今まではそれを試みる方法が無いと認められ、又さういふ熱心な人も居なかつた。今や其方法は既に見出され、又親切に古代を考へて見ようといふ若い人も多くなつた。終にはこの變化の理法が見付からずには居まいと思ふ。一つの目標としては神供調進の方式と、及び其管理と配當とが、何人の手によつて行はれるかを、見て行くといふことも便利であらう。祭に見物があり又遠方からの參詣があつて、神態(カミワザ)や神輿渡御のきらびやかな行事を伴なふものは、附近の評判が高いのを見てもわかるやうに、實は其數は甚だ限られて居るのである。さういふ評判のある同じ御社でも、年にたゞ一度の大祭以外、別に何十何度と算へるほどの定例の祭があつて、その多くは他人を交へずに、靜寂の間に擧行せられて居る。さうして斯ういふ場合にも、なほ一度として神に御供へ物を上げない祭といふものは無いのである。それをどういふ風に準備し又處理するかは、通例は土地の經濟事情、又は年久しい慣行と、之を守らうとする人の數によつてきまり、住民の出入の少ない處ほど、古い形や考へ方が多く保存せられて居る。從つて全國を見比べると、殆とあらゆる變遷の段階が見られる。假に一卷の正しい神道史を書いた人がまだ無いとしても、この現實相こそは未だ讀まれざる歴史である。

現在の神社制度は、大體に中央の大きな御社に行はれて居るものを基準として、地方の端端の區々たるものを揃へようといふ方針と察せられるが、實際はまだ今までの年久しい行き掛りに讓歩しなければならぬ場合が多いやうである。たとへば三里五里の廣い區域に亙つてたつた一人しか神職が居らず、幾つもの御社の祠掌を兼務して居るものがある。近畿地方などのやうに、神社があれば神官が必ず其片脇に住んで居る土地ばかりを見馴れた者には、何だか物足らず又衰微のやうにも感じられるが、是は住民が協同して神を祭り或はその中心たる舊家の主人が、當然に祭主の任務を果して居る村で、新たに其樣な專門の家を設定するだけの餘地も必要も無かつたもの、私等から見れば寧ろ一時代古い形が殘つて居るのである。頭屋・一年神主などの慣行のまだ續いて居る土地では、村民は大抵は一度、祭の大役を勤めた者で、かいなでの若い神職よりは事務にも作法にも通曉して居る。外から來た者には中々

勤めにくく、よほど遠慮がちに介添の役に甘んじて居るか、さうで無ければずつと學問智能がすぐれて、所謂氏子總代等を引廻す位の力が無いと此地位には居りにくい。それで今もなほ九州でいふホッドンのやうな、甚だ遠慮深い巡回神職の往來が續いて居るのである。

九

諸國の古くからの仕來りを見ると、ホウリといひタイフといふ職にも、定まつた内容があるわけでは無い。たとへば伊豆の七島では、ホウリはもと名主の兼ねて居たほどの重々しい職であつて、八丈島などは後に之を別の家に引繼いだが、それも亦世襲であつた。鹿兒島縣の七島でも、地ボウリ本ボウリなどの名があつて、家筋と年功によつて當然に其人はきまつたらしく、其地位は相應に高いものであつた。或は族長の神を祭る權能ある者を、さう呼んで居たのかとも考へられる。古史の天野祝・小竹祝などのハフリも、地名を名のつて居たのを見ると是も亦其類であつて、職業と言はうよりも、地位といふべきもので無かつたかと思ふ。ところが九州の南部などに於て、現在ホイと呼びホッドンと謂つて居るのは、たゞ次から次へと祭に雇はれて、祭式の一部分を勤めるだけの輕い地位で、居村に專屬の御社を持つて居るのやら居らぬのやら、それすらも私たちは知らない。遠江の天龍川上流地方でホウジ、又周防の大島でホウジンと謂ふのも、名だけはやはりこのハフリらしいが、是等はもう一段と地位が低いやうである。

タイフといふ名前も是と同樣に、先祖代々同じ御社に奉仕し、神の御血筋を引くとさへ傳へて居るタイフサマの家もあれば、一方には又九州などのホッドンのやうに、年に一度か二度たゞ傭はれて來て、祭の片端にしか參與しない大夫もある。ホウリが上代にあつたといふ祝のハフリと、同じ言葉の保存であることはほゞ確かなやうだが、その昔あつたといふ祝とても、實はどういふことをして居たものかまだはつきりとしては居ない。今はたゞ語原論見たやうな推測說ばかりが行はれて居る時代であり、しかも昔もやはり時と地方とのちがひが有つたかも知れぬのである。之に反して、タイフが大夫であることは先づ問題は無く、其文字が輸入であつただけに、始めて之を用ゐた人の心持はよくわかる。つまりはすぐれて貴とい御方の御側に近づき得る者、「夫」の中でも特に大なる者、古記にはマウチギミといふ訓さ

へ附いて居て、今ならば侍者といふやうな意味であつたことは想像せられる。それが後追々と種類を分岐して、中國地方でいふタクダイフ(託大夫)、土佐でイチダイフ(伽大夫)、關東の諸國には舞大夫などゝ呼ばれる家筋を生じた。或は神主とタイフとは全く別で、前者は一つ〳〵の御社に專屬する社人だが、タイフは附近の村々を巡つて、神樂の役だけをする一つ低い階級の如く見られて居る地方もある。大夫筋と稱して普通民の緣組を好まなかつた家々もある。つまりは後代に新たなる種類が加はつたのである。是は淨瑠璃の大夫や人形の大夫、もつと進んでは遊女までもさう呼ぶやうになつたのを見てもわかるやうに、或は中世以後の意味の擴張であり、曾てあつたものゝ變化では無かつたのかも知れぬが、しかも一旦應用が斯ういふ境まで延びると、もう一方には避けて之を名のらぬ者が出來るのは自然である。江戸時代の新語としては、各藩の家老をもさういふことがあつた。是は昔からある朝廷の官名と共に、わざとダイブと發音させて民間のタイフと區別して居たらしく、又餘りにも物が懸け隔たつて居れば、構はずに兩存させることも出來たかも知れぬが、同じく神祭りに奉仕する者が二通りあるとすると、一方の低い地位の者にさう謂ふ以上は、もう他の一方には同じ名が使へなかつたわけで、是が土地毎に甚だしく內容のちがつて居る原因と見られる。

大夫さんといふ言葉は、現在はホウリよりもずつと弘く行はれて居る。北は奥州の會津以北、中部にも信州などは處々、南は中國からさきは到る處で耳にする名で、しかも二つの土地を突き合せたら、或は不愉快の感を抱くかも知れぬと思ふのは、前にも擧げた如く是をやゝ安つぽく、僅かな定額で雇はれて來る臨時の輔佐役の如く、見て居る土地がまだ折々はあるからである。私はこの全國區々な事實を、次のやうに說明しようとして居る。卽ち是は神職が職業化する一つ前の狀態であつて、此人で無くては祭の或役目は勤まらぬといふ考へから、單に家の特權として其任務を世襲せしめただけで無く、更に一歩を進めて其家は神役にかゝりきりで、他の活計事業には携はれないやうに、なつて行く路筋に至るのではないかと思つて居る。ホウリは大夫よりも一段と早く、この專業化を完成したやうに思はれて居るが、それでもまだ若干は例外が殘つて居る。たとへば京都府東北隅の加佐郡野原などは、元は三十何戸かのホウリ株といふものがあつて、廻り持ちで氏神の神役を勤めて來たことは、他の地方でいふ頭屋制も同じであつたのが、後に協議の末その中の或一戸に全部を引受けさせ、今は其家のみが此村のホウリである。ところがそこから餘り遠くない若狹の常神村の如きは、今でもまだ四十二戸のホウリといふ家が有つて、半年づゝの廻り持ちで、正月と七月の朔日

に交代して神主の役を勤めて居る。この變化を生じた原因は、村によつて信心の強さ弱さがあると共に、物忌精進の嚴重さにも著しい差異があり、更に又是から生ずる經濟上の拘束にも、堪へられるものと否とがあつたからであらう。頭屋は勿論大きな榮譽であり、又舊家の特權でもあつたが、之に伴なうて可なり大きな義務もある。それ故に現在は折々はその免除を乞ふ者と、喜び競うて之に就かうとする者と、村の狀況に應じて幾段と無き差異が生じて居るのである。

大夫も是と同樣に、曾ては村全體の、もしくは少なくとも多數の長百姓の、協同の任務であつた時代があつた。その痕跡は今もそちこちに殘り、たとへば農家の主人の祭の役を果したものだけが、何大夫の通稱を名のり得るといふ村もある。さうかと思ふと右衞門左衞門が勝手次第であると同じく、たゞ何と無くその通稱を用ゐる處もあり、或は私などの故鄕のやうに、一二の特定の家だけが代々何大夫を通り名に付けるといふ例もあるので、其風習の起りがそれ〳〵別であつた氣遣ひは無い。最初は恐らくは何れも皆神祭と關係のある者の普通名詞であり、祭の儀式の中でも神饌供進といふやうな、最も神に近い部分に奉仕する者が大夫であつたのが、後々或家の主人の呼び名ともなり、更に又何人がさう名乘つてもよいことになつたのは、誰でも知つて居る兵衞や衞門の擴張と同じであつたらう。この想像がもし誤りなくば、大夫も亦若狹や丹後の海岸のホウリと同樣に、本來は職業の名では無かつたのである。ちやうど鬪取が毎年の優勝者の名であつたのに、いつの間にか相撲を業とする者の敬稱のやうになつた如く、後々之によつて衣食する專門の者に此名を付與した結果、もう其他の者には同じ名は用ゐられなくなつたのである。

一〇

神主とかミコとかいふ名稱の如きも、やはり同じ事情によつて適用の範圍が移動し、又は地方的に內容が區々になつて居る。さういふ中でも神主といふ名は、今でもさうやたらには用ゐず、又は之を神職と同じでないと思つて居る土地は多い。この二つを混同して居るのは東京と其附近位なもので、他の多くの土地では可なりはつきりとした區別があり、從つてさういふ標準語を聽くと屢〻誤解を生ずる。殊に頭屋の慣例のまだ守られて居る御社では、神

職は指導者であり又は監督者であつても神主では無い。神主はたゞ本百姓の勤める役だと心得て居る。尤も一方には神職にして同時に神主になり得る家が、有るといふことは知つて居るのだが、それは寧ろ近世に入つて、段々と數少なくなつて居るのである。つまりは現今の神職なるものゝ根原が、最初から又は中世以後、既に幾通りかに分れて居たのである。それに新たなる任命制度が加はつたのだから、この經濟生活と交渉のある一側面は、至つて複雜なものとならざるを得ない。それで自分は之を出來るだけ判り易くする爲に、大體に二通りに分けて見ようとして居る。その一つは土地の住民、神の氏人の中から出た神職、他の一つは中世以後に、外から入つて來た神職、是に又新舊の可なり著しい差異があるのである。

第一種の土地生え抜きの神職の中には、爭ふべからざる一門の宗家で、家と神社との因緣を不可分に考へ、時として神の御血筋を引いた直系の子孫とさへ信じて居るものがあつた。斯ういふのが普通に神主と謂つても亦通ずる神職である。領主その他外部の崇敬が厚く、寄進の所領財產が豐かである場合には、彼等も其餘澤を受けて、奉仕を一つの專業とすることが出來たのだが、さういふ御社の數は實は何程も無かつた。他の大多數はその御社に仕へんが爲に、別に農林その他の生產にいそしんで居た。乃ち彼等にとつては神祭は最も高尙なる消費事業であつた。祭の經費を支辨するが爲には、自身先づ進んで農民の生活をしたのであつた。戰國の世ならば家門の安泰を維持する爲に戰もしなければならなかつたらうし、さうでなくても俗界の因緣は絕ち得なかつた故に、喜捨に活きて居る僧侶とはちがつて、教理の發達に專心することは出來ず、ひたすら傳統の守持に忠誠であつただけなので、折々は新たなる文化の時代相と調和し得ず、もしくはやゝ不利益なる妥協をして居る。さういふ苦境を脫するが爲にも、職務を純一にし生活の基礎を獨立せしめんとする試みは、起らざるを得なかつたのである。八丈島のホウリが名主家から分れて出たやうに、兄弟の一人又は一門の中の或一人の適任者を指定して、新たに神主家を創立した例は方々にあつたやうだが、是とても行く〳〵專業になりやすいといふ程度で、やはり最初のうちは本業は農、自身耕作のすべてに携はらぬまでも、生計の根據を所有の土地の生產に、置かずには居られなかつたやうである。然るに他の一方に於ては氏人の繁榮增加、乃至は幾つかの氏族の合同によつて、多數の村民が一つの御社の神を祭るやうになると、この唯一戶の重なる家に、祭祀の特權を委ねてしまふことが出來ず、我も彼も共々に神の御側に仕へたいといふことになつて、順番交代して神主の役を勤めようとして、終に今見るやうな廻り神主、又は頭屋の規約といふものが

出來て來たのである。斯うなると愈〻事は面倒で、如何に信仰は熱烈であらうとも、不馴れな爲に修練は足らず、中には又不適任な者も出やすいので、何等か外部の條件が變るたびに、次第に第二種の神職の必要を多くする結果を見た。明治初頭の制度改革の如きも、言はゞその必要の特殊に顯著だつた場合の一つであつた。

一一

第二種の外部から來た神職の起りも、決してさう新らしいものでは無い。此中には今でもなほ多くの地方に見られるやうに、本來はどこか近くの村の御社に仕へて居た大夫又はホウリが、力が餘りもしくは特別の素養があつて、賴まれて來て祭の式を援助して居るうちに、段々と必要な人になり、家を分ち又は移住してこちらの御社に專屬したといふのも有ることは確かだが、別にその以外に非常に遠い處から、斯ういふ業務の爲に旅行して來て、新たに便宜のある地に土着した者が可なり多いのである。是は大和の朝廷の終りに近い頃から、急に盛んになつて來た神々の遷徙、東國に在つては鹿島の御子神、鎭西の方からは八幡神設樂神などが、託宣を以て次々と移動なされたこと、元一つの趨勢の現はれでは無いかと私は察するのだが、それにはまだ安全な證據は無い。とにかくに此方はたゞ神職だけが遠くから遣つて來て、土地に前々からあつた御社に御仕へ申すことになつたのである。この事は別にやゝ詳しく記述した書物もあるから、爰には只さういふ事があつたといふだけに止めて置くが、ともかくも單なる私の想像では無い。可なり著しい一つの證跡は、府縣の多くの有力な御社の神職家が、其家名を共通にして居るのみで無く、往々にして似よつた祭の儀禮、又は特殊なる舞やかたりごとを持ち傳へて居ることで、殊に祭神と自分の家との緣故を說く場合に於て、一方在來の氏人等は、當然に神の後裔と名のつて居るに對して、この方は外戚の親を稱し、さういふ中でも所謂三輪式の神話、卽ち淸く美しい處女が恩寵を受けて、神の御子を儲けたと說く者が多い。或は又神に祀られたまふ貴人の、臣下僕從の家筋といひ、もしくは始めて大神を奉戴して遠くから旅して來たといふ物語を傳へる者もあつて、それが何れも異常に印象的な一つの型を具へて居る。氏神は氏人等の遠い昔の祖神だといふ考へ方が、この爲に段々と片隅へ押し遣られた姿になつたのは、恐らくはこの第二種の由緒譚の、國內に

普及した結果だらうと私などは見て居る。土地に生え抜きの、最初から神を御祭り申して居る家々でも、何かの機會にさう信じ始める場合は絶無とまでは言へまいが、御社が既に儼存して居るところへ、後から新たに移住して來た者が、特に斯ういふ種類の因縁を感じやすかつたであらう。全國大小の御社の縁起と祭神の由來が、是が爲に複雜になつたことは迷惑なやうなものだが、もしも斯ういふ幾つかの變化と異同とが無かつたら、ちやうど村々の創業史も同じやうに、却つてその單調によつて人の記憶に根を下すことが出來ず、從つて比較を以て段々と一つ以前の姿に、探り近よることが困難になつて居たことであらう。

近世の記錄に現はれた所だけを見ると、此等の本國のほゞわかつて居る外來神職、鈴木榎本小野横山長谷川五十嵐といふやうな家々も、多くは他の一方の神と共に起つた舊族長の家と、見た目はさして異ならぬ土豪の生活をして居る。官府の庇護の新たに加はらぬ限り、單なる神祭りの職分のみを以て世業を支へることは出來なかつた故に、彼等も最初はやはり農耕に賴らなければ、安全なる土着は望み難かつたものと思はれる。さうして世代を重ねて行くうちには、その聲望門地はおのづから高まり、後には御社の獨り古く、我家のそれよりも遙かに新らしいものであることを、承認しなければならぬ必要は無くなつたのであるが、尙其家傳の中には中央の大姓から分岐したことを、一つの誇りとして語り繼ぐ者が稀で無い。しかも政權や武力の據るべき背景も無くて、是ほどにも弘く全國の各府縣に、散らばり且つ榮えて居る門黨といふものも異數である。今まで其理由を考へようとした人も無く、現に又祭祀と緣の無い職業に在るものも多いけれども、その幸福なる原因として想像し得べきものは一つしかない。卽ち移住が彼等の家の數を增加させ、優秀なる信仰が又其移住を可能にしたとより、他には考へて見やうも無いのである。日本が今でもさういふ需要の多い國であることは、「あるきみこ」雇はれ祝の多いのを見てもわかる。どこにさういふ供給源があるかは別問題として、とにかくに同じ目的を以て移動漂泊して居る宗教業者の數は、現在もなほ相應に多いのである。彼等はまだ定住の地を得ない爲に、既に土着した人々からは差別視せられて居る。さうして兩者の地位は世と共に懸隔して居る。以前はさうでも無かつたといふことに心付くこと、是が沿革を明かにする一つの祕訣であると私は考へて居る。

一二

今日謂ふ所の各派神道の、過去五六百年に亙つた興隆を考へて見るのに、必ずしも不世出の偉人の唱導に基づくとのみは言はれない。他の一面には又民間にも、之を待ち迎へるだけの要求が無かつたら、斯うはならなかつたらうと思はれる事情がある。村人が族長や故老に率ゐられて、年久しく自ら神の祭を續けて居る中に來て、是からは私が助けてやらう、この役目だけは私たちに任せないかと言ふ爲には、何か彼等のもたぬやうな技能知識か、尋常の者には不可能な解說釋義か、つまりは自ら恃むに足る何物かゞ必要であつた。實際に又神祭りの管理者が專業にならなければ、修めることも出來ず又發達もしなかつたらうと思はれるやうな學問が、中世に入つてから急に盛んになつて來て居るのである。一つには人間の智能が進み經驗が豐かになつて、新たなる懷疑が頭を擡げたからといふこともあらうが、別に今一つの原因としては、天台眞言の習合教義から白川吉田の學說、降つては吉川惟足とか吉見幸和とかいふ類の多くの神道家までが、盛んに口傳奧許しの關門を設けて居たのも、動機はこの素人神主と專業神主との間隔を、出來るだけ廣く引離さうといふ趣旨ではなかつたかと思ふ。つまり民間に既にさういふ註文が廣まつて居なかつたならば、獨立して此樣にまで綿密な一種の研究が、榮え且つ普及することは無かつた筈である。其痕跡の殊に著しく見られるのは、元を尋ねれば何でもないやうな長短さま〳〵の唱へごと、是にやゝ尤もらし過ぎるほどの講釋が附いたこと、或は近頃杉山壽榮男氏などの蒐集して居られる無數の御幣の剪り方、紙の折り方や紐の結び方の色々の變化、それに一つ〳〵の理由と法則があるとなると、普通の者には到底學び取ることは出來ず、どうしても特殊の修業をした人たちに、其部分だけは委ねずには居られぬことになる。是が上世以來の常の姿では無く、後々發達して斯うなつたものといふことは、此知識を今でも及びなき事としてあきらめて居る者が、國の隅々には澤山に居ることからも推定し得られる。

しかし必ずしもわざと方式を煩瑣にして、普通の人々に斷念せしめようとしなくとも、祭の任務は段々と我々には重過ぎるやうになつて來ては居る。昔の農民には當り前の事であつた祭前齋忌、祭を中心としたさま〳〵の拘束、それが新らしい世の經濟生活には一通りなら

ぬ障碍であつた。一つの大きな例を擧げると、喪の忌に在る者の謹慎、之を徹底的に守らうとすれば、神に近よることはさておき、他の村人に立ちまじつて普通の生產に働くことも出來ない。以前はその隔離の期間だけ、外から養うてやる制度もあつたらしいが、もう久しく其習はしも絶えて、資力や職業によつては喪中でも、自分だけの活計を立てなければならぬ者が多くなつた。門口に竹の簾を垂れ忌中と書いて、人が穢れに染まることを警戒する風は都會にもまだ殘つて居るけれども、商賣の必要上すぐに其貼札を剝ぎ取つて、內部の忌服だけはなほ續けて居る。其上に喪をとむらふ社交は世と共に親密になつて、一戶に不幸があれば多くの隣人が、神を拜むに適せざる身となつたのである。一年神主の物忌の嚴重だつた土地では、その主人夫婦だけは警戒して、さういふ穢れに遠ざかつて居るけれども、なほその以外にも色々の小さな拘束、忘れて犯しさうな物忌の禁のあつたことは、たつた一つの肥料の問題だけを考へて見てもわかる。しかも一方には忌の期間は相應に永く、之を完全に守らぬと祭の效果が現はれず、又は却つて惡い結果を招くかもしれぬといふ不安のみは、依然として平民の心の中を支配して居たのである。この二つの必要の對立を折合はせる爲に、頭屋交替の制度も恐らくは大いに發達し、更に又代願代參代垢離の風習、卽ち或一人を代表者として、尤も嚴重にこの義務を守らせ、又は或一人が代つて祭の役を勤めると、皆の者が奉仕したと同じことになるといふ樣な、考へ方が段々と擴張して來たのである。斯ういふ職分は專業になりやすかつた。江戶で願人だのスタ〳〵坊主だのと謂つたのは、最も低俗な零落の形ではあるが、是とても我々の信仰行爲の、他人に代行せしめ得ることが認められなかつたら、商賣として成り立つ筈はなかつた。まして多くの行人とか先達とかいふ人々は、學識があり又練修があつて、寧ろ我々本人が自ら携はるよりも、もつと有效だらうといふ信賴をさへ受けて居たのである。或は戰國時代の交通杜絕と、熊野や富士白山のやうな遠方の神々の祭に參加する信仰が大いに起つて、それがこの新たな風習の原因となつたやうに、考へて居る人も多からうが、他の一面にはやはり祭に奉仕する者の條件の充たし難いものが多くなつて、次第に神と氏人との間に立つ者を必要とした事情が、別になほ一つは有つたのである。だから此變遷は全國到る處、個々の土地限りの、他から參りの無い御社にも及ばんとして居る。祭の奉仕に當るべき者が變れば、其樣式も亦おのづから改まらざるを得ないであらう。供物が祭の庭で卽座に直會し得るものから、段々に貯藏運搬に適するものとなり、從つてその管理處分の方法が問題となり始めたことは、既に出雲の美保關などの、頭屋一年神主の時

代からであつた。是を佛堂僧院の慣行に、同化したものと見ることは誤つて居る。其方の影響も絶無とまでは言へまいが、なほ御社そのものゝ方にも、永く常人の全部に祭を掌らしめ得ないやうな、新たなる事情は生れて居たのである。此狀態をなほ持續して行くがよいか、但しは又何等かの考慮を費すがよいかは、前にも言ふ如くもはや日本民俗學の領分の外である。我々は單に昔は今日の通りでなかつたことを知ればよいのである。さうしてもし出來るならば、如何にして斯く變遷することになつたかを、もう少し的確且つ簡明に、同胞の誰にでも說き得るやうに、心掛けて居ればそれでよいと思つて居る。

參詣と參拜

一

是まで神社制度の研究者たちに、とかく見殘されようとして居た一つの問題は、御賽錢箱がいつの頃、又如何なる必要に基づいて始まつたかといふことである。是は全く凡俗な、人を下品にする事柄に相違ないが、之を明白にした上でないと、日本の祭の變遷の最も大きなものを考へて見ることが出來ない。さうして又この物のまだ無かつた時代を想像することによつて、國の大小さま〳〵の御社の間に、存外に著しい一致のあつたことが心付かれるのである。さういふ發見の大きな欣びの爲に、忍んで我々はこの下品な問題をも見なほさなければならない。

誰しも最初から、是が我邦の御社に備はつて居たものと思ふ人は無い。たゞその新たに入用になつた時期について疑ひがあり、もしくは又全然無知なのである。一つには書物に其樣な模樣替へを記錄したものが、少なかつたといふことも原因であらうが、たとへ記錄がまるで無からうとも、之を確かめる途が絶えて居るわけではない。私たちの方法は、先づ以て現在はどうなつて居るかといふことから始める。二つ以上のちがつた狀態があるときまれば、どちらの方が前の形であり、どうしてそれを後の方に改めたのであらうかを考へて見る。勿論双方が共に新らしいといふ場合も有り得るが、さうだつたところで一どきに斯う變つたのでないとすれば、やはり變化の順序だけは見られるわけである。めい〳〵が最も手近なところから、次々と注意をして行くのが自然であらう。私などの故郷では、氏神社の拜殿の奥正面に、可なり大きな御賽錢箱が置いてあつた外に、國道の傍に建造した惠比須社にも、鈴の綱のま下に此箱が設けられて居た。村の人のよく參る御社は、この他にも幾つかあつたのだが、それにはまだ是が出來て居なかつたのは、多分他所から參詣する人の、有るか無いかによる差別であつた爲と思ふ。素よりたゞ豫想であり、殊に參詣の多い少ないなどは不定なことだが、近世の宮大工等には、社殿を新築すれば普通に之を取附けるといふのが、もう常識となつて居たものであつた。だから近頃は又變つて來たらうが、私たちが地方をあるきまはつた頃までは、ちやうど自分のうぶすなの社も同じやうに、名は賽錢箱でも供米ばかりが打散つて雀小鳥が集まり、たまさか底の方に光つたものが入つて居ると、覗いて子供が問題にするといふやうな御社は、到る處にあつたのである。是を以て信仰の深い淺いを卜することは絶對に出來ない。言はゞ神を拜む方式といふものが、斯うして段々と二流れに分れてしまつたのである。

この一つの箱を備へ付けない御社は、現在もまだ中々多い。獨り家々の屋敷神や內神、毎年日を定めて幟を立て假屋をしつらへる樣な、所謂無格以下の小さい神々だけでは無い。一村の鎭守として花やかな祭の執り行はれる御社でも、建築の型によつては之を置くやうな場所が無く、もしくは最初からその必要を感じなかつたかと思はれるものも、關東以北の田舍には屢〻見られる。一方には又京阪地方の名ある大社にも、曾てはあつたのかも知れぬが、現在は全く之を闕くものがある。この方は拜殿の正面に白布が敷いてあつて、其上には無數の銀銅貨が散亂して居るのみか、それにまじつて紙に包み又は包まざるウチマキの、雪霰の如くこぼれて居るのが、何とも言はれない複雜な印象を與へる。卽ちちやうど自分等の村の

社とは正反對に、爰では是ほどの著しい必要があるに拘らず、まるで賽錢といふものは無視せられて居るのである。もしも不可解といふものがこの世には有り得ないとすれば、是は改めて今一度、神を拜まうとする者の立場に立つて、考へて見なければならぬ歴史だと思ふ。

二

サイセンが輸入の新語であつたことは何人も認める。故にもし之を上げる慣習がその一語と共に、新たに始まつたものでないとするならば、以前は何と謂つて居たらうかゞ第一に考へられざるを得ない。最初に先づ想像に浮ぶのは、ヌサといふのがそれでは無かつたらうかといふことで、是は少なくとも問題にして見る價値がある。ヌサは手向山の菅家の歌以來、旅をする者の臨時の祭の捧げ物で、又紅葉の錦にも擬せらるべき美しい布帛であつたことが推測せられて居る。或はそれをこま〳〵と剪り刻んで、撒き散らすのが本意のやうに說いた者もあり、それはよつぽど危ない話だとしても、少なくとも常に幣帛とつゞけて言ふ位に、絹や精巧の麻布を用ゐて居たことだけは爭はれない。しかし是はたゞ中世の財貨の、最も普遍的な品が布帛だつた爲であつて、神に捧げる物は必ずそれと限つて居たのではない。現にヌサとはもう言はなかつたらうが、馬や劒太刀その他くさ〳〵の寶を、人を怡ばしめると同じ意味に、進獻する風は久しく續いて居り、古くは田園神戸を寄せ、又神賤を貢した例さへ傳はつて居る。貨幣の幣などもその本來の用途の一つは亦是で、必ずしも神にまゐらせることを主として居たとは言はれぬが、最近に志賀の大宮址からも發掘せられたやうに、之を一つの目的に豫期して居たことは窺はれ、新鑄の錢貨を先づ名ある神社に御送りなされたことも、正史に見えて居る。近世年々の幣帛供進なども、確かなことはまだ承はつて居らぬが、その一品として或はこの所謂オタカラも加はつて居ることかと思ふ。民間には素よりこの慣例が弘く久しく行はれ、決して新たなる略儀とは言はれないのである。しかも近頃見るやうな大きな賽錢箱、我も〳〵と遠くの方から、かちんからりんと投げ込むやうな方式が、前から有つたものとは何としても考へることが出來ぬ。

この變遷の順序も、今ならばまだ容易に見て知ることが出來る。土地で固い家とか昔風な人とか言はれるものゝ特質は、大抵は斯ういふ方面に於て認められるのである。錢貨にオア

シとかオテウモク(御鳥目)とかいふ敬語の用ゐられるのは、今日はたゞ女言葉のやうに解せられるだらうが、本來は神や貴人に對する幣にもなるといふことを、意識して居たからの謹みでは無かつたらうか。私たちのやうな新らしい人間でも、支拂ひの時だけは別として、人に金を贈るのに剝き出しでは氣が咎める。近頃は漸う西洋人を眞似て、使用人への心づけだけは、裸で遣つても禮を言はれるやうになつたが、まだ〳〵その以外の者は受取らずに顏を見るであらう。だからあの通り、何でも結構といふやうな大きな箱が出て居ても、其中にはなほ若干の白紙のオヒネリがまじつて居るのである。

オヒネリといふ古風な言葉は、東京でも一部には之を使ふ者が居るが、其意味は頗る全國の田舍とちがつて居る。こちらでは俗に謂ふチップ、卽ち目下の者に向つてぽいと拋つて遣るやうなはした金に、此名を適用して居た時期が暫らくあつたのだが、それも既に必要が無くならうとして居る。以前は斯んなものがオヒネリで無かつたことは、賽錢箱の中からでも窺はれる。地方は是が今一段と嚴肅で、オヒネリを包むべき日と場合とは一定し、他にも應用はあるが主としては神詣での用であつた。さうして更に何よりも顯著なことには、此紙包みの中には必ず洗米が入つて居たのである。此問題は前に「食物と心臟」といふ著書の中にやや細かく述べて置いた。是は物よりも敬意の表示、今一歩を進めて言ふならば、先方の靈の承認を意味して居たことは、年の始めの最も改まつた期日に、家の周圍の泉や井戸その他あらゆる小さき神々だけで無く、日頃大事にして居る爐の鈎とか臼農具とかにまで、所謂トビを捻つて結はへ附ける土地があるのを見てもわかる。人にも之を贈るのは恐らくはその思想の延長であつて、しかも其オヒネリの米といふのは、必ず最初から用意せられ、家内一同の者も戴いて共にたべる所の、蓬萊とも三方とも謂ふ高折敷の中の米であつた。それを東京などではもう省略してしまつて、たゞ小錢だけを白紙に捻つたのを、オヒネリと呼ぶやうになつて居るのである。

三

僅か五十年か百年前の、オヒネリといふものゝ用法が今とちがふことは、浮世繪や市井文藝の中にいくらでも證據が殘つて居る。氣永に搜して見る人さへ有れば、斯んな講釋はする

必要が無いのである。以前の江戸人は是を又十二銅とも呼んで居た。それはこの此米の紙包みの中へ、更に十二文の銅錢を添へたからだつたが、後には勿體なくも米の方は省略してしまつて、錢だけを包むことになつたのである。其理由も亦頗る明白で、都會には前章にも言つた如く、代願代參の風が殊に盛んに行はれ、自身堂宮に參詣することの出來ぬ人の爲に、取次ぎ仲立ちを業とする者が年增しに多くなつて、しかもその連中は米を目あてにはしなかつた。勿論この錢とても手數料では無く、必ず何々樣へ十二銅を御上げなされと謂つて來たのだが、其錢がどういふ樣に處理せられるかは、大よそこちらにも判つて居た。後には依賴といふよりも寄附につくといふ氣持になり、都會ではこのオヒネリといふものゝ格式を、情けないほども低下させたのである。是と現在もなほ確かに行はれて居る村々のオヒネリと、二つは始めから別々のものだと、もし言へるものなら言ひたい位だが、奈何せんまだ記憶して居る老人も多いやうに、都會のオヒネリもやはり近い頃までは信仰用であつた。

どちらが退化であり又零落の姿であつたかは、二つを比較して見れば忽ち明かである。諸君の鄕里にも多分同じ例が多いであらうが、私たちの少年の頃は、たとへ子供でも御宮に詣るのに、このオヒネリを持たぬ者は一人も無かつた。それを手に持つて行くことが、卽ち參詣であるとまで思つて居た。儉約な家では半紙を二つ又は四つに切つて、それに白米を包んで紙の端を捻つて居た。オヒネリと謂つても無論通じたが、私たちの家では普通オセンマイといひ、又オサングともウチマキとも呼んで居た。サングは卽ち散供の字音であつて、參詣をすると先づ其包みを解いて、中の米を賽錢箱の上に撒いたのである。といふわけは境內には幾つかの小さい神樣が居られるし、又矢大臣などゝ謂つた二座の門客神(カドマラウド)にも、左右の狛犬にも、少しづゝ上げなければならぬからであつた。しかし子供の中にはさういふことをする兒ばかりは居ない。或は紙包みのまゝで箱の中へ入れて歸つて來るのもあつた。其包みの中には米の外に、錢を入れたといふのも絕對に無かつたとは言へないが、少なくとも自分の家に於ては、オヒネリは常に米一色であつた。しかも一方には又御賽錢を持つて詣ることも知つて居たのだが、我々は何かこの二つの詣り方に、區別があるものゝやうに思つて、之を少しも不思議だとは感じなかつたのである。

今日になつて見ると、この打撒きの風習の起りは中々解しにくい。先づ第一に春秋の定まつた祭の日には、多くの氏人はこの御散供を持たずに詣るのである。中には持つて行くのが癖になつて、斯ういふ日にも手ぶらでは詣らぬ人があるか知らぬが、とにかくに此日は神酒

餅を始めとし、御供へ申すものが色々あるのだから、是が少しも重要で無くなるのである。それで私の親などは、ウチマキを祭典の最も略式のものと解して、家の神棚の朝々の拜禮にも、常の日はこの洗米だけをさし上げて居たやうであるが、それと紙に包んだ御散供とは、たしかに又同じものでは無かつた。一方はとにかく恭敬の限りを盡して神の御前に供進したに反して、こちらはたゞ無造作に打散らして居たのである。何か根原に於て二つは異なるものがあつたのを、忘れて段々に之を接近せしめようとして居たのではなからうか。最近に報告せられた青森縣三戸郡の話に（旅と傳說一四卷九號）、あの地方の村社にも賽錢箱はあるのだが、別に正門の後の方に木箱を掛けて、「外まきは此箱の中へ入れて下さい」と書いてあるのを、見かけることがあるといふ。この外まきは多分ウチマキを內撒きと解し、之に對して設けられた話であらうが、社の神樣を拜むに先だつて、ちがつた方角に向つて散供の一部又は金錢までを撒きちらすのださうである。それでは粗末になる故に其分も別の箱の中に納めるやうにといふ新らしい注意と思はれる。いつの頃からこの所謂外撒きの慣行があつたらうかといふ點に、我々の興味は集注する。中央部の古い御社では、勿論今は其樣なことはしないが、其代りには境內の前後左右に、算へきれぬほどの小さな祠が列なつて居て、參詣者は通例御本社に詣つた序に、もとは其小祠に殘らず拜をすることが普通で、其爲に鳩目錢と稱して、一文を更に十にも分けたほどの、小さな錢を賣つて居たといふ話もある。我々の解し難いことは、今では若宮や本社の從神の外に、是等も末社のうちに算へられて居るが、其小社の多くは餘りにも有名な、歷とした國々の大社の神々を祀つて居ることである。是が上代以來の習はしでないことは、恐らく双方の大社の共に認める所であらうが、さりとて其由來もまだ明かにはなつて居らぬのである。たゞ一座の尊とい神に信心を運ぶ爲には、之に伴なうて外の神々を拜まなければならぬといふ點だけは、少なくとも奧南部の外撒きと似て居る。是は祖靈と村の神社との元一つであつたことを考へぬ人には、或はあまりに隔絕した類似と見られるかも知らぬが、所謂盆の祭にも同じ事があるのである。無緣とか外精靈（ホカジョウロ）とか、その他土地によつて名はいろ〳〵あるが、先祖さまを迎へて祭をする盆棚の他に、又はその片隅に、別にその以外の靈を供養する設備が必ずある。盆は佛法の影響が強く、或は全部が其管轄のやうに思ひ込んで居る人もあるけれども、斯ういふことは恐らくあちらでは說明が出來まい。その上に又正月年越の家々の祭にも、やはり神棚の端や一段下に、ミタマの飯といふものを供へる風習が、信越以東には弘く行はれて居る。卽ちこの二通りの祭り方

には、何か由來するところがなければならぬのである。

四

そこで私の一つの假定說、卽ち將來發見せらるべき事實によつて、確かめられもしくは訂正せられるであらう意見といふものを述べて置くが、是は我々日本國民の信仰する神々に、最初から內と外と二通りがあつたことを示すものかと思はれる。その二つのちがひは、元は可なりはつきりしたものだつたのが、國が統一に向つて進んだ如く、後追々に融合し又錯綜した爲に、境目の見分けにくい場合が多くなつたのである。しかし氣をつけて見れば判らぬ程ではない。多分斯うだらうと思ふ點を取立てゝいふと、內といふのはよく知つて居て親しい神、他の一方はまだ氣心を知らぬ故に畏るべき神、さうして方法を盡せば段々と、內の神と同じに又は其以上に、恩德を垂れたまふ神であつた。その經驗の累積といふものが、卽ち我々の神祇道の發達、又變遷では無かつたらうかと私は考へて居る。

我々の經驗の最初の機會は羈旅であつた。人が生れた土地の中でのみ働いて居るうちは、よその神々を思ふ折がない。たま〳〵やゝ遠く家を離れた場合にも、なほうぶすなの庇護、我氏神の兼ての御約諾を信ずる事が出來たであらう。家に信心深く祭をよく仕へて忌み籠つて居る者があるといふことを、唯一の力として居たのは、昔の世の軍兵ばかりでは無かつた。姉妹は旅する者の護り神だといふことは、もとは沖繩諸島でも信じられて居た。さうして此島々などは、今でもまだ他系の家の神の祭に、參加することが稀なのである。しかし故鄕の消息が久しく絕え、雲山蒼波の隔たりが重なつて行くと、人は漸うに行く先々の神の强い力を感ぜずには居られない。殊に險難の嶺を越え、風濤忽ちにして吹き起るやうな濟(ワタリ)に臨むと、爰にもまだ知らぬ畏こき神がましまして、人の禍福を支配したまふかといふ想像が起りがちであつたらう。さうしてそれには又其土地々々の、住民の單純にして熱烈なる信仰の姿が、孤獨の異鄕人に影響を與へるといふこともあり得たのである。

異鄕人の祭には、彼等の故鄕に於て行はれる恒例の祭と比べて、當然に異なるべき點が幾つとも無くあつた筈である。その主要なる一つは神樣の御ありか、乃至は御擧動を知らなかつたことから來る。故鄕の御社には幻しの遺傳ともいふべきものがあつた。今の人から見れ

ば何でも無いことだらうが、神の示現に際しては年久しい兆候が感じられ、或は山頂の雲の靡き或は神木の梢のそよぎなどによつて、時刻方角を覺知せぬ者は無く、最も素朴なる者の眼には、更に又黒髪白の御衣の、髣髴として近づき來る御影をさへ看取られたのであつた。然るに旅では其樣な豫定といふものが一つも無い。其上に友も無く調度もとゝのはず、多くは又俄かの營みであつた故に、日頃の祭の如く行き屆いた飲饌の數を揃へることが出來なかつた。それがウチマキといふやうな餘りにも簡單な方式を採用して、之を又一つの祭と見なければならなかつた必要のもとかと思ふ。採用と私が謂ふのにも反對の意見は起り得る。しかし米が食物の最も優れたものであつた爲か、之を呪法の目的に打ち散らした風習は、古く我邦にもあり又近隣の他民族にもある。それ故に同じ行爲は、段々に祭と同じ列の信仰儀式と、解せられるやうになつたものと考へられるのである。この想像がもし誤つて居たとしても、さういふ又一つの祭の型が、新たに追加せられたといふことにはかはりは無い。つまりは祭る人の地位狀況の變化、又信仰の展開によつて、斯ういふ方法でしか崇敬信賴の意を表し得ない場合が出來て來たのである。ヌサは細かく切り刻んだ布帛だといふ神道家の說なども、米の例を思ひ合せると丸きり跡方も無いことゝは言へない。たゞ斯うするものに限つたやうに言ふのがをかしいのである。それから今一つの起り得べき疑問は、旅がウチマキの祭の必要のもとゝいふならば、村の氏神社の參詣に、是を携へて行くのはどうしたわけだといふことであらうが、それには更に又近世の信仰の發達、兼て住民の熟知して居ない色々の神の、進出といふことが考へられなければならぬ。疫病その他の思ひ掛けぬ災厄が現はれるたびに、必ず新たなる神の祭が加はつたことは、昔からの習はしであつた。殊に以前は無かつたらうと思ふ獨り祭の普及があり、又祭の日の著しい增加があつた。故に是等を一通り明かにしてからでないと、まだこの疑問には明確に答へられぬのである。

五

この內外二通りの祭の式に於て、何よりも著明な相異の點は、祭の日の定め方であらう。一方は記憶を超越するほどの古い代から、誰がきめたとも言へない例日があつて、其日に參り合せぬと神に近づき奉ることも出來ず、氏子の列からも落伍するやうな不安があつて、今

なほ遙かなる旅の空から、祭には還つて來るといふ村人が多いのに反して、他の一方は主として一身の都合により、外には友も無い森閑とした社頭に、寂しく額づいて行く場合が毎度あつた。それでも吉日を見定め、最短期間の物忌をして、旅の日數の延びるのを厭はなかつた者がもとは多く、近頃でもまだ折よく祭の日に通り合せたことを大きな欣びとした記錄はあるのだが、さういふ氣の長い人も益〻少なくなつた。交通は日增しに迅速になる。いつでも時は構はず御社のあたりを過ぎた際に、參詣をせぬのは却つて非禮のやうに、考へる人ばかりが多くなつて來たのである。さうして祭と參詣とは、最初から二つ別々のものであつたといふ推定は、まさに成り立たうとして居るのである。

どうして此樣な烈しい變化が、最近僅かな年月の間に起つたものかは、其事の善し惡し、又は避け難いか否かの問題とは別に、一度は諸君も是非考へて見なければならぬ。原因は勿論幾つもあつて、詳しく說明しようとしても見落しはあり得るが、其一つとして算へられるのは物忌の簡略、卽ち旅人の道すがらの參詣のみは、土地の神々の祭に守られて居る最も手輕な精進をすらも、守らずともよいかの如く考へられ始めたことである。是もつまりは一般の弛緩、齋忌は祭の重要なる條件であつたことを、心づかぬ人の多くなつた結果とも言へるが、しかも村々の心安い祭については、忌の拘束が可なり寬大になつて後まで、なほ遠くのあらたかな神樣に對しては、特に嚴重に守られて居た時代もあつたのである。所謂代願代垢離の職業が盛んになつたのも其爲で、必ずしも道が遙かで旅行が出來なかつたからで無く、一つには此拘束がむつかしいばかりに、願掛け御禮申しの念を抱きつゝも、一種專業の人たちを賴まずには居られぬ者が多かつた。それが都會に於ては夙く流弊を生じ、ちつとも宛てにはならなくなつたのも已むを得なかつたが、それに促されて精進そのものゝ意義までを、無視するに至つたのは新らしい現象であつた。

極端な例を擧げた方が話はわかり易い。出羽の三山の參詣などは、今でも里々に精進の小屋があつて、一七日以前から若者が其中に籠り、毎日水を浴み別火をするといふ例は東北にはまだ多いのだが、さういふ人たちの群と前後して、元氣な學生などの同じ嶺を經廻る者には、何一つそれに似た用意は無い。彼等も無論御社の前に出れば恭しく拜をする。さうしてそれをも參詣と思つて、以前の先達が徒らに無用の制限を設け、たゞ各自の特權を護らうとするかの如く批判して居るのである。富士は行者の特權の最も早く失はれた御山であるが、それでも黑山のやうな雜多な登山客にまじつて、昔ながらの白衣白鉢卷の信徒が、ちらほら

と上下して居る。山岳會の青年たちが、何かといふとあの山この山を征服したなどゝいふのが、けしからぬことのやうに慨歎して居る人のあるのを私も聽いた。女を登山させてよいかどうかは、大和の金峯山で近頃問題になり、それだけは確か否決せられたやうに記憶する。しかし女では無くとも死穢とか宍喰ひの穢れとか、以前は自ら參拜を制限して居た者が色々あつた。其障碍を外側からは如何にして見分けるか。是だけは餘りにむつかしいので、今なほ成行きに任せたまゝになつて居る。

六

つまり祭にはどんなに僅かでも條件の守るべきものがあり、參詣には近年それが急に無くなつた。是が二つの者の手を別たうとして居る原因となつて居ることは確かである。平たく言ふならば、昔も今の通りと思つて居る人が多くなつて居る。斷じてさういふ事は無いといふ證據は、特に精進の嚴しかつた靈山の例を引かずとも、たゞの平地の御社にも必ず石の水盤があり、それを横目に見て前進する人が、稀ならず有るのを注意しただけでも足りる。しかもこの樣な外側のものゝ變り方よりも、なほ一段と重々しい原因は內部にもあつた。それを出來るだけわかり易く言へば、祈願の減少といふのが最も當つて居ると私は思ふ。

祈願は祭の三つの要件のうちでも、特に旅人の切なる志の表はれであつた。「たむけよくせよ」といふ古い歌も有るやうに、家に在る日は是といふ改まつた欲求の無い者でも、一たび異鄕に入れば色々の愁ひ、分けても前途の厄難と、離れて居る者の身の上とが氣にかゝつて、神を求めて御惠みに縋らうとする以外には、其不安を散ずべき方法を知らず、しかも現實には其願ひの容れられた結果と、解し得る場合も相應に多かつたのである。個人各自の信心といふものが、人生の爲に必要だといふ經驗は、通例佛敎によつて得たものゝやうに說かれて居るが、私などは寧ろ人が家鄕の地を出てあるくといふことが、もつと大きな機會であつたらうとまで想像して居る。少なくとも一門一鄕黨が集合して、氏の神だけをお祭り申して居る間は、さういふ一種の拔け驅けのやうな祈願は、もとは試みる餘地は無かつた筈である。村にも後々は人が個別に、一身の私事を願掛けする御社も出來ては來たが、ともかくも氏神鎭守の神だけは、その恩澤は共同のものと考へられて居た。村の例祭にも勿論祈願の意は含

まれて居る。土地を昔ながらの平穩無事の狀態に保ち續け、何等の豫想に反する驚きも悲みも知らずに、一年を重ね得たのも神の御力であり、それが又全住民の心の底の望みであることを、しろしめしての神德とは解して居たのであるが、それは既に高祖始祖以來、御許しなされたものとして滿幅の信賴を寄せて居る。たま〳〵祈請の言葉をくり返すとしても、たゞ定まつた一つの形を守るのみで、今更事新らしく申し上げるやうな、此上の願ひの無かつたのは當り前である。だから今年も亦安らかに、生產を遂げ得たといふ喜びのかへり申しと、神の御力に賴りきつて、些しでも他意はもたぬといふ渴仰讃歎との二つの表白に、村々の祭はやゝ偏して居たので、是がもし外の神々への祈願を主とした祭とちがふといふならば、其岐れ目は單に祭の奉仕者の境涯の差からであつた。類の相異と言はうよりも、もとはたゞ力の入れどころのちがひであつた。旅人も無事に長途の旅を終へて、再び同じ地を通れば必ず報賽の祭をしたであらうし、神德のたゝへ事は、恐らくはおもねりに近いほども丁寧であつたらうが、その根本の動機は新たなる願ひを、今まで思つて見たこともない他所の神に、掛けて見ようとするからであつた。卽ち露はな言葉であるが、彼等は新たなる神を試みたので、この一點だけは大昔の難波堀江の大きな歷史とも近かつたのである。それが一方には可なり著しい影響を村々の神の祭に及ぼして置きながら、それ自身はいつと無く最初の動機から遠ざかり、しまひには斯うして遠くまで信心の歩を運ぶ者を、神せせりなどゝ謂つて輕しめるやうになり、何の願ひも無く又恐らくは深い期待ももたぬ人々が、たゞ名ある神々の大前に額づくだけを以て足れりとするやうになつたのは、大きな變遷であつたと言はなければならぬ。今はまだ明白にならぬまでも、隱れた原因は又一つ、此上に働いて居るにちがひないのである。

七

そこで最初に先づ村々の祭が、如何にしてたゞの參詣になつたかを考へ、其次にはそれに影響したかと思ふ他所の神の參詣の、更に又一段と變化した事情を考へて見よう。之に比べると賽錢の問題などは實は小さく、多分はこの說明の過程に於て獨りでに解決すると思ふ。村の御社の方には、世を追うて臨時の祭が數を增して來て居る。中にはその必要が繁かつた

爲に、いつの頃よりか恒例の中に編入したものも多い。最初の必要は風旱虫疫、その他不時の災害が起つたのを攘ひのけんが爲の祈禱で、是は經濟生活の濃かになると共に、免れ難い舊地の惱みであるが、それが爲に古來の本祭の樣式を改造すること無く、別に新たな祈願の祭を設けたのは心あるわざで、必ずしも時期がくひちがつて間に合はぬ爲のみでは無かつたと思ふ。この折の祭の方法は夜籠り日籠り、家々から供物を調じて來て、先づ神に進らせてから直會をする。その手順は年に一度の大祭とかはることも無く、寧ろ素朴の世の姿が此中から窺はれる。といふのは貧しい小さな里の本祭にも、神輿獅子頭等の神態は少しも無くて、是とごく近いものがあるからである。山村で獵に入り漁村で漁に出るに先だつて營む祭などには、或は始めからあつたかと思はれるものもあるが、やはり成果がやゝ不安定になつてから、農村の秋籠りなどゝ同じに行はれることになつたのかも知れない。少なくとも戰に出る前の祭などは、必ず行はれ又當然の臨時祭であつたらうと思ふ。

其次に新たに起つたらうと思ふ祭は、村全體を襲ふやうな時疫その他の不安では無く、村の住民の一人が危篤に陷つた時に、急に思ひ立たれる臨時のもので、或は最初には族長その他、重要なる代表者の病氣した時だけに行はれて居たかも知れぬが、それを擴張して常の人にも及ばしめたのは、まことに好ましい新儀であつた。中國地方などでは之を千祈禱、又は勢祈禱と呼ぶ村もある。ちやうど雨乞の千駄焚きに、衆人が萱薪を山上に持寄つて焚くのと同じく、一人や二人の願ひでは望み難い奇瑞を、群の集めた念力によつて招き致さうとしたもので、ちやうど國初以來の氏の神の信仰にも一致する。最初は恐らく總がゝりであつたらうと思ふが、氏子が廣くなり又禱らるゝ病人が小さくなると、其加勢の區域が垣内や隣組と狹まり、更に身うちや懇意な者だけの千度詣り、又は所謂御百度となつて、一人で何回とも無く御詣りの形をくり返したのである。この變遷の如きは、至つて徐々とした又自然のものではあつたが、それでもなほ我々の神詣でを、今風のものにしてしまふのに與つて力があつた。部落一同が寄り集まつて、或一人の病者の爲に臨時に祈禱をしたやうな場合ならば、必ず祭の日にふさはしい神酒神饌の供へ物があつたらうが、近世の草雙紙に屢〻取扱つた如き、たつた一人の孝子貞女が、深夜にそつと起きて井戸端に垢離をとり、神の廣前に歩みを運ぶといふことになつては、其祭の方式は省かれるのみか、普通に供物の最も略なものと考へられて居たオヒネリの散供すらも、持つて行かれぬことが多かつたであらう。參詣といふ言葉は前にも言つたやうに、もとは祭の庭に出仕して、或時間その片端に伺候して居ることを意

味して居た。それが一回の拜禮を以て直ちに退出することになつてしまつたのも、この爲ばかりとは決して言はれぬが、御百度といふやうな新らしい風習も、一つの誘因にはなつて居たのである。

氏神が本來群の爲の神樣であつたことは言ふまでも無い。然るに時あつて個人の祈願、それも公共の支持し得るものだけで無く、單なる私の望みまでも聽き屆けたまふものゝ如く、信じられるに至つたのは理由が無くてはならぬ。其一つには村の御社の合同、卽ち幾つかの氏族が共々に、一つの神を氏神として齋くことになつたからで、人が多くなり生活が複雜になれば、たとへ利害はさう容易に牴觸せぬまでも、個々の信心の深さ正しさの差によつて、神の恩寵もおのづから厚薄が有るやうに、考へ始めることは免れない。さうして又現實に、人によつて神の御威德を仰ぐ純一さが、必ずしも一樣で無くなつたばかりか、その解釋にも亦世の智慧が干涉して、行動は漸く區々になつて來たのである。しかも大體に於て篤信の人は重んじられ、神を恭敬することはいつの場合にも善行と認められて居た故に、參詣の條件と準備が簡易となると共に、その度數は一般に多くなる傾きをもつて居たやうである。たとへば日參は御百度と共に、所謂千垢離勢祈禱から變形したもので、何かよく〳〵の心願ある者の思ひ立つものとなつて居たのが、後にはたゞ毎日の無事息災を念ずる爲に、老人などの之を日課とする者が出來て來た。平田篤胤翁の時代に、まだ問題として論究せられた毎朝神拜の作法なども、今日はもう當然のことゝなつて居る。神が毎年の定まつた日に高い處から御降り成されて、待ち喜ぶ民衆の祭を享けたまふといふ、古い世の考へ方と向き合せると、是は何分にも合點の行かぬことの樣だが、兩者の中間には數百年以上、或は千年にも近い體驗と推理とが介在して居るのである。代々の氏人は神の御力を信賴するの餘り、たとへ御約束の期日の外でも、切なる危急の祈請には出でゝ應へたまふべしと思ひ、又現に最も謹愿なる者の爲に、救助と警戒の手をさし伸べたまふ實例の、稀ならずあつたことを記憶して居るのである。神は正直の頭に宿りたまふといふ教訓も元は神託であつた。或は其解釋が次々と進んで、神如在といふことを、恭ふ人々の心の中に、又はかしこまり額づく社殿の奥深く、隱れて常にいますといふ意味に取つた者も多かつたらう。とにかくに是は既に近世の事實であつて、それをたゞ古い世の記錄によつて、置き換へることは不可能になつて居る。其上に境を離れて遠く旅する者の、經驗も亦十分にそれを裏書したのである。內と外との二つの祭が、段々に融合せんとして來たのも自然である。

八

爰に私が說明の便宜の爲に、假に外の祭もしくは知らぬ神と謂つたものには、際限も無い數と種類とがあつた。其中にはいつを祭の日とし、如何なる方法によつて祭を營むのが御心にかなふかを、今に至るまでなほ明かにし得ない神々があると共に、一方には夙に有力なる一團の祭人があつて、懇ろに年々の祭をくり返して居るに拘らず、單に土地を隔て所屬を異にするばかりに、偶然に久しく相知らずに居たといふ御社も亦多かつた。人が始めて異鄕の土を踏んで、測らず靈異を感じ、祭を仕へんとする志を起す場合にも、おのづからこの兩端の差があつたことは、現世の我々にもよく知られて居る。神を寄せ奉る者の最初の問ひは、今でも必ず「どなた樣ですか」、又は「何樣でいらせられますか」を以て始まつて居る。之に對する答へは近代は殊に區々で、御蔭に古記錄のどの部分を搜しても、絕えて景跡の無い神の名が顯はれ、或は又佛敎道敎の感染の爭へないやうな、新らしい神の名が名のられるのみか、時としては是まで八百萬の神の中に算へても居なかつたものゝ靈が躍り出ることさへある。それを信ずると否とは、素より當人の判斷力、或は環境の力といふべきものであつたらうが、その效果の必ずしも一時一處に止まらなかつたことは、今日地方に分布する小社と祠、さては籔神ともガミとも呼ばれる色々の神の、弘い區域に亙つた名の一致を見てもわかる。顯祀もしくは「神を顯はし奉る」と、古い書物に於ては之を名づけて居る。是にも以前は嚴肅なる作法があり、且つ一鄕一門の衆人の前に於て、最も愼重に行はれたことゝ思はれるが、後々僅かな者が生れ在所の群から離れて、旅の孤獨を味はふやうな時代が來ると、この種の新らしい神の遭遇は、漸く頻繁に又容易にもなつて、しかも個人に取つては絕大の印象であつた故に、折々はそれが周圍を感化し、弘く久しく傳はつて行く場合もあつたやうに思はれる。淫祠邪神の惡い名を負はされて、或は國家の煩ひとまで歎かれて居る小さな社の信仰でも、是を悉く巫覡の徒の、詐謀の致す所なりと言ひ切る人はあるまい。つまりは發見があまりに新らしく、又發見者の用意が足らず、もしくは解釋が蕪雜を極めて居た爲に、未だ一部の崇祀者以外の、承認を得るに足らぬだけである。それが我々の熱烈なる祈願の祭に始まらぬものは、今でもまだ例外と言つてよい位に少ないのである。

部族割據の遠い昔の世の事を考へて見ると、この承認は時として隣に住む者の祭にも及ばなかつた。今でも村々の主神の御社の方には、却つて幽かながら對抗の痕をさへ殘し留めて居るが、それを不可解な現象と感ずるまでに、一國の信仰は完全に融合してしまつたのである。民族文化の發達が、ひとりでに此結果を促したと見ることは、恐らくは歴朝の有難きおぼしめしを忘れ、殊に神社行政の根本方策に、年久しき傳統のあることを省みない者として、非難せられても一言無いであらう。しかし他の一面に國民各自の側に於ても、國の交通の開け進むと共に、更に一段と積極的に、その統一の御趣旨に共鳴し、又徹底して來たことも事實であつて、この事實は又往々にして看過せられて居る。人が異鄕の土を踏んで、先づ最初に土地の住民の崇め敬ひ、祭を仕へ奉る神を問ひ、力の限り其信仰の行事に參與せんとしたこと、及び旅から入つて來る人のいはひかしづく神々を、何等の危惧の念も無しに、素朴に受け迎へ共々に祈請を捧げようとしたことなども、世を追うて盛んになつたのだから、或は國民本有の性情とまでは言へなくとも、言はゞ我々の固有信仰は、國の團結の大いなる必要に適應して、次第にその寛容の度を加へ、内外多くの神の併立兩存を可能ならしめるほど、至つて協調しやすい素質を始めから具へて居たものと、推測し得られるかと私は思ふ。此點は獨り國内各地の神々の御間だけで無く、海を渡つて遙々と送られて來た、新古の宗教に就ても同じことが考へられる。兩部神道の一奇觀を展開した本地垂跡說、權現とか影向とかいふ新らしい言葉でも、唱へて之を信じたのは日本人であつた。それを外國傳道師の智略ばかりに基づくものとは、我々は思つて居ない。家々の神棚は現在もまだ問題である。三教歸一の論は組合せを取替へて、いつの時代にも通用して居る。つまりは國民の中に人の祭り拜む神を、承認しようといふ態度は古くからあつたのである。さうして同胞國民どうしの間では、其態度が特に親切だつたのである。

九

人が年久しく一つの土地に於て、祭り來れる神を知り奉ることゝ、新たに未知の神を顯はし奉ることゝには、少なくとも二つの點に於て手續きの著しい差があつた。其一つは祭を營むべき時期、第二には神の實在を認める方式であつた。今まで何人がいつ何處で、祭に仕へ

て居たかを知ることの出來ぬ場合には、期日は自由といふよりも多分卽座に、發見に引續いて祭つたので、それが顯祀といふ言葉の起りでもあつたらうかと思ふ。その期日は勿論恒例となり、今ある高名の御社にも、その大事件の日を記念として居るものが多い。之に對して既に各所の氏人の群が、父祖の代から祭りつゞけて居ることを知つた場合には、出來るならば其日を待ち合せようとしたことであらう。祭は本來多數の意思を統一したところに、深祕の効果があることを經驗して居るからで、よほどの自信があり能力もある人で無いと、旅程その他の一身上の必要から、單獨に臨時の祭を企てることは、少なくとも昔の世には出來ぬことであつたと思ふ。

それから第二段に神を認め奉る方法、是にも亦必ずしも神憑りや口寄せのやうな、强烈なる啓示の方法を期待するに及ばなかつた。單なる求むる心、もしくは微々たる靈感の動きだけでも、もし傍らに能の謠ひなどに見る如き、一二の「ところの者」の來合はせたものさへあれば、忽ちにして神の有難さを知ることが出來たので、たゞその最初の不思議が大きければ大きいほど、承認が確かな搖がないものになつたのみである。中將實方の笠島道祖或は紀貫之の蟻通明神等、昔の實例は幾つも記錄せられて居る。ありとほしをば思ふべしやは、知らなかつたればこそ色々の怠りもあつた。既に神ましますと心づいた上は、いかでか神德を否み奉るべきと、其場に奉獻して行くものが卽ちヌサであつて、人により又は場合によつて、直ちに其ヌサを機會として合同の祭を營むものと、之を次の祭の日まで保管して置かうとするものと、元は二通りあつたのを、後々祭の物忌が一般に簡單になつて、臨時の祭の方が次第に多くなつたものと私は解して居る。さうして他の一方には近代の所謂御賽錢の如き、略式極まるヌサを納めた者までが、なほ一回の私祭を擧行したやうな感を抱き、たゞに神を禮讃して御威德の顯然たることを承認するのみならず、なほ其機會を以て一身の祈願を籠めて行くやうな、習はしを作つたのかと思はれる。一族門黨の大小には拘らず、本來すべて皆團體の公けの行事として、五穀成就村內安全、たゞ共同の祈願を專らとした御社の祭が、後いつと無く個人各自の、時としては互ひに相反する望みごとを以て、御煩はし申す手段とするやうになつたことは、或は他にも學者の說明があるかも知らぬが、少なくとも自分だけは、斯ういふ風に解するより他に、今はまだ別の道を知らぬのである。

一〇

ヌサは我邦の最古の單語の一つであつて、今はもう其語原を究めることがむつかしくなつて居る。しかし少なくとも是に漢語の幣の字を宛て始めた頃までは、まだその本來の意味がわかつて居たものと信じてよい。是が公けの又大切な言葉だから、私はさう信用するのである。さうするとその外來文字の本國に於ける、あの時代の用法は參考になる。向ふは日本のやうに神に進らせる物だけには限つて居なかつたが、それでも決して凡下の贈遺にまでは幣の字は用ゐて居ない。單に敬意の表示と謂つては廣きに失するかも知らぬが、こちらでも後は少しづゝ其範圍を制限しようとして居るのである。是は一つには國柄であつて、一たび朝家の御用ゐになつた言葉は、常人は之を愼み避けようとした爲もあらう。それよりも更に重重しい理由は、國の公けの御ヌサには、是と隨伴する特別の意義があつたことである。公の文書の用語としては、官知と謂つて居たのがそれであつた。如何に熟烈なる信仰に支持せられて居たにしても、兎に角に一地方の一氏族限りに祭り來れる御社が、新たに官府の知る所となるといふことは、幣帛の御贈賜にもました大いなる感激でなければならぬ。それを又世代の遠さや氏人の數力等に准じて、大小の差を立て中外の所管を區分なされたのも、一方の所謂天神地祇の同一視と共に、國の統一の上に最も效果の多い方策であつた。明治の新政は一千年を隔てゝ、改めて又この制度の大部分を復古なされたのだが、その根本の御趣旨を窺ひ知ることは困難でない。もしもこの新たな秩序が確立しなかつたら、たとへ政治上の藩離はすべて取除くことが出來ても、信仰はなほ割據して、互ひに比隣の祭を理解せず、もしくは獨り大いに榮えんことを競うたであらう。敬神は維新の大いなる合言葉の一つであつた。さうして朝廷は先づその手本を示されたのである。

是が現在の祭の大小、又は官祭私祭の區別の元になつて居ることは、最初から自分の說いて見たいと思つて居た要點であるが、其前になほ一つ必ず明かにして置かねばならぬのは、奉幣は元來御社の外部、卽ち氏人の群に屬せざる者の崇敬を表示する方法の總稱であつたのを、其中に於て朝廷官府の御使によつて進められるものと、その他の場合とを截然と區別し、特に一方のみを重要視する理由が、次々と强くなつて來たことである。幕末勤王論の最も盛

んであつた頃に、斯ういふ歌を詠んだ人がある。

ぬさ賜ふ二荒の山のほとゝぎす初音や神のかしこまりなる

作者の名はもう忘れたが、歌の感銘は今も私にははつきりと殘つて居る。この思想は既に古く、近頃でも故猪熊夏樹翁などは、「王は十善、神は九善」といふことを、始終口にして居られた。即ち神々よりも大御門の方が、一段と御位は高いと言ふのである。明治以降の如く、人臣の頻りに神と祀らるゝ御時世に於ては、殊にこの大義名分は明らかにせられねばならぬが、起原の最も久しい各地方の御社としても、その百中の九十九までは、曾ては陛下を顯つ神として、仰ぎたゝへた人々の神靈を祀つて居るとすれば、幣帛は常に下賜であり、神の御應答は先づかしこまりであつたと解することは、國民としては當然の推理とも見られる。固より朝家にも御自らの祭はあつた。殊に蒼生に代つて年を乞ひ晴雨を禱りたまひ、さては災厄疾癘の攘却を祈願したまふことは、大いなる政事の隨一であつたが、それにはおのづから定まつた御社があつたのである。他の國中數多くの神々は、偏へにこの畏こき御承認を力として、愈〻その威德と靈驗を住民の間に耀かしたまふべきものといふことは、夙に一般民衆の常識とさへなつて居たのである。即ち祈願と報謝との、祭の二つの表現は彼等自身のもので、たゞ他の一つの渴仰禮讃が、官府の支持によつて著しく高め强められることになつて居たのである。この點は程度の大きな差はあつても、指命を受けたる國司郡領、乃至は後世の諸領主の、自發の崇敬に於ても同じことであつたらうと思ふ。しかもその奉幣の期日を、一年の最も主要なる祭の日、もしくは各社の由來最も遠く、最も異色に富むものゝ行はれる日に擇んだのも、多分はこの政策の本旨、即ち信仰統一の社會的意義を、意識してのわざであつたらう。臨時祭の期日がすぐに恒例となつて、屢〻本祭の翌日と定められたなどは、頗る自分の推測を支持する。乃ちそれはたゞ祭に仕ふる者の激勵であつただけで無く、同時に弘く社外の普通人に、一つの神を知り且つ敬ふ機會を、供與する結果をも豫期せられたのである。その上に平和交通の激增、都市人口の集注と城下町の成長とがあつた。今日謂ふところの官祭が花やかさに於て卓越し、同じ一つの御社の祭に、大小の著しい等差を生じたのも、寧ろ自然なことであつた。私は先年豐後の保戸島に渡つて、土地の老人から、「今宵は小さな神が御降りになります」といふ語を聽いて、非常に珍らしく思つて之を「海南小記」に書き留めて置いた。一つの土地の氏神に大小があるべき筈は無い。しかし外側の人々の參加の有る無しといふことは、まづ是ほどにも住民の感覺に影響するものだつたのである。

一

自分などの解するところでは、官祭はもと所謂官知の御社に、ヌサの贈進せられる日の祭であつた。朝廷が御自ら、諸司に命じて祭らしめたまふものとは異なり、此方にはそれ〳〵土地毎の小さき祭主があつて、夕朝の供饌は其人の任、祈願と御禮申しも其人に由つて住民の總意を傳達した。固よりそれが國家の期する所と、完全に合致して居たことは疑ひも無いが、とにかくに皆その御社の官知以前から、永續して居た式典であつて、新たに之に伴なうて創始せられたといふ祭は、絶無では無いまでも例外ではあつた。然るに祭の御使の參入といふことは、晴れであり大いなる眉目であり、又著しく儀禮の莊嚴を加へた故に、特に其感激が強く濃く、人の心を支配するに至つたのである。地方の神祇のこの殊遇を受けられたのは、元は限られたる數であつたけれども、是がおのづからの統一の指針となつて、汎く一般の信仰を支持して居たことは、記錄の側だけでも擧げ切れぬほどの證據がある。後世の諸領

主がこの從來の制度に遵依して、競うて領内の舊社に對して、崇敬の誠を表した時代になると、この内外二つの動機は往々にして混同せられて居る。豐稔雨乞風水害の防止といふやうな、民と利害を共にする祈願の祭だけで無く、一身の所謂心願の成就にも、なほ各社の氏人に祭を執り行はしめて、幣帛を奉進するといふ例が、段々と多くなつて來て居る。是は一つには領主の族長意識、自分が祭の主任であり適任であるといふ確信の名殘だつたかも知れぬが、少なくとも斯うして幾箇處もの御社の祭に、同時に仕へ得るといふのは新らしい考へ方であつた。しかも一方には進んで敬神の範を示すことによつて、愈〻神々の御德を高め、庶民の信仰を力づけようとした前代の政策は、なほ熟心に踏襲せられて居たのである。

數ある毎年の祭の中で、そのたゞ一つを大祭と名づけ、他を小さな祭とする慣例は、昔からあつたもので無いやうに私には考へられる。官祭を官が御祭りなされるものとする解釋も是と同樣に後のもので、今ならば殆と論議の餘地も無いやうに見えるが、始めてこの漢土の文字を採擇した人々には、或は別に若干の用意のあつたことが、まだ記錄の上からでも證明し得るのではないかと思ふ。少なくとも今日謂ふところの官祭以外の祭を、すべて一括して私祭と呼ぶやうなことは、以前は絶對に無かつた筈である。私祭といふ言葉の儼然として古

く存するのは、何人も記憶する如く、伊勢の大廟に就てゞあつた。爰では朝廷の任命なされた祭主以外、何人にも御祭を營むことは許されて居ない。如何なる歴史の隆替を經ても、この一國至高の御權能のみは搖ぎ無く、現に毎日何萬人といふ參詣人の路を埋める世になつても、是を以て以前の私祭の禁が、解かれたものゝ如く心得て居る者は一人も無いと共に、一方にはその禁條が法文を以て明かにせられたまでは、隨意に國民の或者が、各自の祭を仕へることを認められて居たらうと、推測する者も亦絶對に無いのである。そんなら何の爲に、わざ〳〵此樣な法令が新たに公布せられたらうかといふと、私の解釋ではちやうど此時期に、大きな御社の神德が部外に及び、又は最初から定まつた氏子を持たぬ御社が創建せられて、互ひに聯絡の無い數多の氏族が、競うて祭をすることが認められ、もしくは期待せられた結果、それとは等しなみに見てはならぬといふ御趣旨を、改めて宣明せられる必要が生じたのである。それと對比することも畏れ多い話ながら、村々の小さな氏神の社でも、同じく無始の昔からの慣行によつて、祭主に該當するものは定まつて動かなかつたのである。官には知られぬ故に官祭と呼ぶことは許されぬが、少なくともそれは其土地限りの公けであつたから、公祭と名づけて然るべきものであつた。是に對して比隣の異氏族の者が、押掛け祭をしに來るといふことは有り得ないまでも、一門の中には本家と拮抗して自分が祭主にならうと企てる者は無いとも限らぬ。それを制壓して族長の格式を保つ必要は、古い頃から既に有つた筈であり、それが又個々の聚落の大切な秩序でもあつた。此點から見るときは、どんな小さな月々の祭、幣帛の供進も無く御使の參入も無い土地限りの祭も、決して私祭では無く、しかも信仰の統一を期する爲には、爰にも亦私祭は禁止せらるべきものであつた。

ところが世の中の進みにつれて、色々の變遷が此方面には起つた。一ばん大きなものは氏神の統一、幾つもの異なつた氏族が合同して一つの御社を祭らうとする申し合せで、是には有力なる一つの氏に從屬してしまふものと、大よそ對等なる協力とがあつて、後者の場合には祭主役の輪番制、いはゆるマハリトウ(廻り頭)・一年神主などゝいふものゝ規約が設けられた。斯うなると頭人の不馴れの爲に、段々と輔佐者の地位を重要にし、終に今日の神職制を可能にしたのである。第二の變遷は全國的では無いが、若干の御社の最初から氏人が無く、言はゞ各地離れ〳〵の信徒を集めて、祭を營むやうに出來て居るものが、次第に數が增し又榮えて來たことで、其影響はいつとなしに村々の神社にまで影響して、何の由緒も持たぬ遠來の旅人の爲に、臨時に祈願報賽の祭をすることを、惟しむ者が少なくなり、今や私祭の禁

はこの方面に於て、殆と保ち難くなつて來て居る。少なくとも固有信仰の歴史を明かにせんとする者にとつて、是などは誠に不幸なる混亂であつた。

それから第三の更に大いなる變遷としては、祭に奉仕した諸國の舊家の退轉といふことがある。明治維新を境として、生活事情の萬般の異動の中でも、是ほど大規模で又重要なものは少ない。族長の沒落といふことは昔の世にもあつたらうが、それは唯一つ〳〵の出來事であつた上に、以前は氏族の分散と共に、氏の神の祭の絶えるのは已むを得ぬことゝ見られて居た。ところが此度ばかりは、家が去つて御社はなほ殘つたのである。是は兩者の間柄が、既にやゝ淡く力弱くなつて居た結果とも見られるし、一方から見れば國と社會との外部の崇敬が、之を支持するまでに强力になつて居た爲とも言ひ得る。とにかくに地方には以前の祭仕の家が、留まつてその御役を相續して居る者は、上下を通じて算へるほどしか無く、他は悉くもつと適任と認められる者によつて置換へられ、その人々も亦次々に更代して居る。十地の住民の窃かなる不安は、自分たちの祈願には言葉に表はさなかつたものが多い。神の年久しい御親しみに因つて、單なる默約として傳はるものを信賴して居た。それが或は個人の熱心なる願望や、新たに外から來た人の事新らしい申しごとに押されて、微弱なものになりはせぬかといふ點である。卽ち公祭と私祭とのけぢめが、公平なる一視同仁によつて、却つて不明に歸するかといふ心配があるのである。全國屈指の繁昌の御社だけはそれでもよい。其他の場合に於てはよほど此點に氣を付けないと、鄕土の連帶の信仰は衰へるかも知れないのである。少なくとも年にたゞ一度の大祭だけに力を入れて、常の日に神を懷ふ者が少なくなつて行く懸念があるのである。

一二

最後に是は民俗學の範圍外であるが、日本の祭を考へて見ようとする諸君に、此ついでを以て語つて置きたいことが一つある。諸君の境涯は、前人のあらゆる好き經驗を習得し、久しく世に隱れて居た法則の發見から、最初の恩惠を受けるのみならず、更に人生の今後の變化に就ても最も、確實に近い見透しを付ける術を學ぶことを許されて居る。假に寸分の迷ひも誤りも無しに、今から一生の計畫を立てゝ進まうとする人が、この中に有つたとしてもそ

れは少しも意外で無い。寧ろさうあるべきを私も期待して居る。しかし其技術を公有とし、乃至同胞の誰にでも傳授し得るものとせぬ限りは、まだ〳〵諸君と同じ條件に惠まれない者が、ちがつた科學以外の方式によつて、その生活上の不安を處理しようとするのを、輕蔑する權利などは無い。少なくとも是を普通とする根本の考へ方を、あらまし理解した上でないと、批評をしたつもりでも實は批評にはなつて居ないのである。

我々日本人の固有信仰は、昔から今に一貫して、他には似たる例を見出さぬほど、單純で潔白で又私の無いものであつた。欽明天皇の十三年、佛像經卷が進獻せられてよりこの方、大小さま〳〵の宗教は次々に、外から入つて來れば又國内にも結成せられて、それを信じた人の記錄ばかりが、いやが上にも積み重ねられて居るが、しかも彼等の側から見て、不信者と呼ばなければならぬ人の數は、いつの時代にも非常に多かつただけで無く、一方には又全國の隅々に及ぶまで、兒が生れて產屋の忌が晴れるや否や、先づうぶすなの御社を拜みに詣ることゝ、秋毎の收穫の終りに際して、村を擧つて氏神の祭に、一年の歡喜を傾け盡すことの二つだけは、殆と例外も無しに現在もなほ持續して居るのである。この一見奇異に近い併立兩存の現象が、果して國教の本質に基づくもので無く、すべて外來布教者の勸說智術、乃至は解釋の擴充のみによつて、可能になつたと言ひ得るか否かは、夙に日本の宗教史學の、答へて居なければならぬ重要な課題であつた。是がわかつて居たならばせずともよかつた論諍に、或は大分の力が費されて居たやうにも想像せられる。是非とも今からでも之を明かにしようと努めなければならぬ。

方法は必ずしもさう困難なもので無いと思ふ。最初に先づめい〳〵が子供の頃から、もしくは現存の年長者たちの、たゞ神樣と謂つて居るものが、何をさして居るかを考へて見るがよいのである。何神何處の神と名を呼ぶのは色々あつても、村には神の森又は御宮といつて通ずるものは一つしか無かつた。二つ以上の門黨が合同して大きな祭を營むやうになつて、特に鎭守といふ言葉も生れたけれども、是は漢語だから新らしい名稱である。女や年寄には依然として、氏神又はうぶすなといふ名が親しみをもち、それが又各鄕土の信仰の、爭ふべくも無い中心であつた。いはゆる神せゝり・佛いぢりの盛んな人たちでも、是と方々の堂宮との内外の區別はおのづから心得て居る。たとへば神を祭るには必ず神主が無ければならぬといふことは、一方では當然の常識であり、他の一方では是が無いのを普通にして居る。卽ち誰でも隨意に私祭をして、恠しむ者の無かつた各地さま〳〵の社や祠や御堂の他に、別に

古來の慣行の通りに定まつた人が奉仕しなければ、祭とはいふことの出來ぬ神樣のおはしますことを、口にこそ出さぬが認めない者はなかつたのである。その二つの境ひ目が制度と經濟事情の變化とによつて、此頃紛らはしくなりかゝつて居るのである。讀みきれない程澤山の書物は世に出ては居るが、まだこの最近の沿革を明かにしたものが無い。獨り「日本の祭」の觀察ばかりが、案外容易にこの隱れたるものを心付かせてくれるのである。

近世以前の信仰生活は、今と比べると遙かに孤立して居た。人は遠い旅行をせず、村と村との間も隔離して、寧ろ對立する場合が多かつた。神を奉じて新たに移住する者以外に、乙が甲から學ぶといふ機會は無かつたのみならず、今でも四國九州と東北地方との間などには、さういふ接觸の可能なほどの交通は行はれて居ない。それで居て神祭の方式だけは、注意して見ると數々の一致を保存して居るのである。是は我々の高祖が最初一つの爐の火にあたり、一つの泉の水を掬んで飲んで居た者の分れであり、しかもいつ迄も昔の感動を、大切に傳へて居た結果とより他には、解釋のしやうも無い大きな事實なのであるが、不幸なことには今まではそれに氣が付く人が無かつた。其代りには一旦それに氣が付けば、其印象は新鮮にして且つ强烈である。諸君の如く無心淡懷に、新たに人生の事實に目を瞠らうとする人々を聽手として、私が歡迎する理由も亦茲に在る。

言語を唯一の表現樣式として、社會行動を會得しようとする現代人にとつては、實は日本の祭はやゝ靜か過ぎる。外の神々を拜む折には、縷々と心の願ひを陳述し、時としては堂々たる願文をさへ納めようとする人たちが、自分の祭となるとたゞ默然と式の庭に參列して、千年以前の古文辭をつらねた、少しも理解の出來ない祭の詞を謹聽して居る。さうしてたゞ數滴の神酒をいたゞいて欣んで退出し、先づ祭はすんだといふ樂しげなる顏をして居るのである。見物と稱する皮相の觀察者には、是でも祭かといふ疑ひが起るであらうし、或は又日本では祭といふものが、既に此樣な祈願も感謝も無い只の一つ儀式になつて居るかといふ樣な、飛んでも無い推斷を下す者も無いとは限らぬが、私だけは是が前々からの當の姿であつて、退化でも何でも無いばかりか、寧ろ近代に入つて、之を幾分か物々しくしようと試みた形跡さへ有ると思つて居る。ちよつと考へて見ても判るやうに、祭が滯りなく終つたといふことが是ほどまで嬉しく、よく〳〵惡い年でも祭をせずに過すことは出來ず、遠くに出て居る者までが日を算へて、必ず還つて來るほどの祭である。それが內部の切なる要求も無く、又精神上の大きな效果も無しに、たゞ因習の力だけで持續して居る筈はない。簡單な語を以

て說明するならば、つまりは我々は言擧げをしなかつただけである。神は人よりも遙かに詳細に、家々の昔を知つて居られる。個々の氏人は產屋を出た當日に、もう神樣に御目通りをして居る。彼等何をこひねがひ何を期待して居るかは、或は本人よりも正確に、神樣は知つて居られるので、普通の人情から推せば、寧ろ外來の神に對するやうに、今更事新らしい名のりをせず、單に物忌の條件を守つて默つて愼み深い拜禮をして居る所に、無限の信賴の意が汲み取られると思つて居るのであつた。よそ外の宗敎を見ても、神と人との約束は常に信仰の根柢であるが、我邦に於てはそれが極度に强く久しく、尊とい親しみにさへ化して居たのである。神が祖靈の力の融合であつたといふことは、私はほゞ疑つて居らぬのであるが、それを立證しようとすると議論になり、又幾つかの例外を說明しなければならぬので、玆ではその點は假に未定として置かう。しかし少なくとも神の恩愛と同情とは、先祖が後裔に對すると近いものであり、同時に神子神孫の嫡流を以て神主とし、祭を其人の代表に委ねて、他の一類の者が安心しきつて居たことは、昔も多くの重い記錄があり、近世にもその例の乏しきを患へない。國の固有の制度は信仰も政治經濟も、すべて互ひに相牽聯して發展して居る。是が國外から後に導き入れたものとの、最も明白なるちがひであつて、何も事新らしく政は祭事だといふ點だけを、强調する必要は無かつたのである。しかし社會生活の複雜になるに伴なうて、いつも個々の機能が同じ方向に、同じ步調を以て進んで行くものとも限らない。たとへば氏族が成長の極、段々と小さく分れ、もしくは强弱の差を現はし、又は相剋の勢ひを生ずると、その統御の方式は改められざるを得ない。人民の遷移が盛んになれば、自然に他氏族との交涉は濃かになつて來る。以前の孤立信仰は保ち難く、異姓によつて祭らるる神々の多くなつたことは、必ずしも新國家の統一行政を待たなかつたのである。我々は恐らく其事實を誤り無く認識すればよいので、未來の國策をその確實なる歷史知識の上に打建てる爲には、改めてこの二つのものゝ交涉を、特に政治と相對する祭事の側から、もう一度見なほさなければならぬだけである。

世界に比類無き神國のマツリゴトの、最も重要なる原則は「承認」であつたと思ふ。朝家が御親ら祭りたまふ一國の宗廟と大社に對して、萬民が無限の崇敬を致すべきことは言ふまでも無いが、同時に他の一方には臣庶の祭り來れる個々の御社を、洩るゝ所なく公認なされ、その若干の最も有力なるものに向つては、祭の日に勅使を派し、或は官府國司をして幣帛を贈進せしめられた。此方策は武家封建の時代にも繼承せられ、更に復古の世になつて著しく

官知の範圍が擴張せられたのである。國民の所謂精神文化の統一は此の如くにして成つた。未だ曾て此神を祭れといひ、其方式を改めよといふ類の制令を下すことなくして、天下は悉く安んじたのである。固より根本に一致があり自然の共通があつて、甲乙扞格の虞れが無かつたことも幸ひであつたが、既に蕃神が災ひをもたらすと氣づかはれた時代にすら、なほ「宜しく情願の人に付すべし」といふ勅諚があり、今又憲法には信教自由の條章が掲げられて、特に國教の目は立てられなかつたのである。我々の祭は祈願の爲、又その祈願の容れられたことに、心の底からの感謝を捧げんが爲に營まれる。さうして神が如何なる聖人賢人にも備へ得ざる德と力とを持ちたまふことを信ぜずして、祭をして居る者は無いのだから、普通の定義によれば是は信仰であり、又系統があるから一つの宗教であるとも言へる。しかも國家の力を以て支持して居たのは、單にその神々の尊さを公けに認められる點だけで、其他はすべて皆國民自らの心で、一端は神代につゞく遼遠の昔より、終始此の如くにして永續して居るのである。もしも是が世の所謂淫祀邪神のやうに、我身我妻子の福利欲望のみの爲に、衆を排して近より禱らうとする祭であつたら、今頃は多分宗派も分立し牴觸も激しく、從うて國家が一視同仁に之を崇敬せられることも無かつたらう。誇つてよいことには日本の祭は、群の公共の祈願を專らにして居た。幟や提灯に文字を書くことが出來るやうになれば、村内安全五穀成就、更に一歩を進めては天下太平と日月清明をまで念じて居て、是には一鄕の者が一人も背馳しなかつたのである。功を社會教育の指導に歸することも私には異存は無い。しかもさういふ善良なる素質があつたればこそ、氏族は衰へても其結合を部落に引繼ぎ、神主たる本家が退轉しても神職を代りに迎へて、之を神主さんと呼んで居る土地さへあるのである。しかしたつた一つの氣遣はしさをいへば、官府に公認せられるといふことゝは、祭司が官府によつて任命せられるといふことゝは、本來二つ別々の事であるに拘らず、前者を重々しく且つ光榮とする結果、祭も亦官府の事務かの如く、混同せられがちなことである。もつと深く立入つて言ふと、この大祭以外の例祭を、あたかも私祭であるやうに觀られやすいことである。この混同は必ず害があると思ふ。敬神は最も由緒ある我邦の神祇政策であり、同時に國民相互の間の美德である。是あるが爲に一國の信仰は統一し又調和した。しかしこの外からの承認がどのくらゐ懇切なものであらうとも、是のみではまだ祭祀の代りにはならない。神は人の敬によつて威德を加へたまふといふことは、貞永式目以來の信條であつたけれども、同時に其反面に於て我々の祭が、常に公共の福祉を目的とした、純一無私のものであ

つたればこそ、總國敬神の念は期せずして是に集注したのだとも言へるのである。ところが我々のまだはつきりと意識せぬうちに、少しづゝこの根本の要件は變つて來た。第一には個人祈願、他には打明けることも出來ない身勝手な願ひごとを、氏神樣に向つて掛けるものが出來て、是には勿論神主の仲介を賴まない。私祭は殆と內外の區別を無視せんとして居る。次には部內の祭の唯一の條件であつた共同の謹愼を、守り得ない者が多くなつて來た。精進潔齋の戒律が日に弛んで、しかもなほ不淨を忌はしとする感覺だけは殘つて居るが故に、神の默約に基づく年來の恩澤が、果して持續して居るかどうかを危ぶむの念は、愚直な者の間に漸く瀰漫せんとして居る。國の固有信仰の傳統に於て、洵に是は一つの大いなる危機である。しかも一方にはたゞ歷史ある敬神の國是を强調することによつて、永く神國の傳統を支持し得べしと、思つて居るらしき人が居るのである。虛禮に陷ることなくんば幸ひである。諸君のやうな次の代の有識者に向つて私の說きたいことは、現在も國民の恐らく三分の二以上、以前はほゞ其全數を擧げて、めい〳〵に所屬の神を祭つて居た。さうして一定の方式を守ることによつて、無言の祈請の必ず聽受せられることを信賴し、心の平和を保ち得たのである。この事實だけはとにかくに認めなければならぬ。然るにこの祭の方式は寧ろ外部の力によつて、段々に押し崩されようとして居る。前章にも一たび說いたやうに、參拜の參はもと參列の意であつた。マキルは卽ち祭の庭に侍坐することであつて、さういふ人々の中には素より精進潔齋をせぬ者などは居なかつた。參る用意が無く又は其資格を缺く者が、憚かつて出て來ぬのも謹愼であり、崇敬の一つの形でもあつた。それが此頃になると人の氣持は變つて、たとへ觸穢があり鳥居をくゞることの許されぬやうな者でも、立ち止つて帽を取り拜をして行かぬと、彼奴非禮といふことになりさうなのである。斯ういふ簡略な拜禮がたゞ回數ばかり多くくり返されて居るのも、つまりは參詣と稱して外から偶然に來合せた者が、祭の始め終りに參向する暇も無く、もしくは時とも無く路次に立ち寄つて、柴手水(シバテウヅ)などゝいふ名ばかりの淨めを以て、神を拜んで居た名殘に他ならぬのだが、信心と敬神との內外のけぢめが明かだつたうちは、是でもまだ格別の損失は無かつた。一旦是が公人の常の所作と認められて、祭に仕へる者までが斯うすればよいと思ふやうになつて、忽ちに儀典の外貌が改まつたのみか、內部の感覺も亦漸く影響を受けて、見物の群衆が祭の中心のやうになり、見物の少ない祭は極度に淋しいものになつてしまつた。昔から此通りであつたと考へることは大きな誤りで、立禮脫帽などは今日の所謂洋服流行より、古い現象では斷じて

無いのである。過去の信仰が今見る國民文化の特長に、たとへ一部でも參與して居ると言ひ得るならば、其信仰がちやうど變化しようとして居ることを、冷眼に看過すことは出來ない。固より是がよいとか惡いとかいふことは、容易には言へることでない。世の中が改まれば斯うなつて行くより他は無いのか、但しは又避け得られる道が有るのに避けなかつたのか。其點は實はまだ私なども決しかねて居る。しかし少なくともどうでもいゝ氣遣ひだけは無い。世人の無關心は言つて見れば無知から來て居る。自ら知るといふ學問が、今日はまだ甚だしく不振なのである。

昭和十七年十一月二十日初版印刷
昭和十七年十二月十日初版發行（五〇〇〇部）
出文第發行承認番號　あ二八〇二六二號

日本の祭
定價金貳圓八拾錢

著作者　柳田國男
東京市世田ヶ谷區成城町

發行者　八坂淺太郎
東京神田駿河臺
京都田中西浦町

印刷者　堀内文治郎
東京神田三崎町

配給元　日本出版配給株式會社
東京神田淡路町二ノ九

發行所　弘文堂書房
東京神田駿河臺
會員番號二一〇五三四
電話神田（二七五二）（二〇八三）

（落丁乱丁有之節は送料当社負担にて取替申上ぐ）

木製本橋・刷印内堀（4 3314 東東）

1359
ॐ

終